

夫のことが怖くて怖くてどうにもならなくなって実家に逃げ戻ったのが初夏の光まぶしい六月の初めで、以来まるひと月、食事とトイレ以外ほとんど布団から起き上がることもなく、ときどき眠ってはときどき目覚め、目覚めている間はスマホでひたすら動画を見て過ごし、まるで無限に与えられた時間を持て余し退屈しきった吸血鬼みたいな生活を鬱々として送っていたのだけれども、老いた母の冷たい眼差しと食事どきに出る嫌味とができるだけ鈍感であろうと努めていたわたしにも徐々に応え始めていたのだろうか、子猫の動画を見ているうちいつの間にか夜が明けた七月の朝、「なんとかしなきゃ」とだしぬけに思い立ち、でもまだ早朝だし役所もハローワークも開いてない、仕方がないのでとにかく体を動かして何かをしようとまずは布団をたたみ部屋の掃除を始めてみたところが、やってみると寝てないせいかわりにテンションが上がってしまい、本棚やクローゼットなどあっちこっちの整理まで始めたらもうちょっとした大掃除みたいになってきて、ついには押入れ下段にある二十年以上も放置していた埃だらけのチェストに手をつけた。そうしてわたしは灰田さんのカセットテープを見つけたのだった。

昔のテレビ番組を録画したビデオテープやラジオの同録なんかを大量に詰め込んでごちゃごちゃの山になった一番上にそのカセットテープはあった。今では見かけないAXIAというブランドロゴのある三十分テープ。ラベルの隅っこの方に、少女時代からあまり変化のないわたしの字で「1989/8/15 灰田さん」とある。中学時代に友人と何かを吹き込んだものだろう。わたしの所有する中でもっとも古い時代のテープだ。なぜそんなものが一番上の目立つところに置いてあるのか自分でもわからない。でも気がつくわたしはそのテープを手を取っていた。聞いてみたい、と強く思った。

古いラジカセが天袋にあるはずだった。わたしは椅子に登り天袋の戸を開け思ったより奥深くに押し込まれていたラジカセを苦勞して取り出した。カセットデッキの二つあるパナソニック製のCDラジカセだ。まだちゃんと動くのか心許なかったけれど、電源プラグをコンセントに差しテープを入れ再生ボタンを押し込むと機械はあたりまえのように作動した。

再生してしばらくの間はテープの回転音だけが続いた。それからガガガサツと雑音が入り、録音部分が始まる。すぐに音楽が流れ始めた。聞き覚えのある曲だった。それも、か

なり思い入れのある歌。――そう、これはわたしが中学生の頃に放送していたテレビアニメ「幻装奇伝サムライドラグリーン」の主題歌だ。神代かみよの龍の魂が封じられたバトルアーマ―を身に着けた五人の少年たちが、現代の東京に突如としてよみがえった闇の帝国と戦う、というストーリーで、もともとは男の子向けのアニメだったのだが、なぜか男子にはほとんど見られず、逆に一部の女子の間でキャラクター人気（だけ）が爆発した作品だった。

音楽は途中でもむろにフェードアウトしていき、やがて途切れた。と、少しの間を置いて、

「あーあ、退屈だなあ」

声がした。灰田さんの声だった。

「こんなに平和が続いたら、体がなまっちゃうよなー」

男の子っぽくつくった声。普通の話し声ではない。セリフをしゃべっているのだ。

「何をのんきなことを……。今このときにも、真夜マヤ將軍たちは虎視眈々と反撃のチャンスがうかがっているかも知れないですよ」

今度は灰田さんよりも低く抑えた声がした。聞いた瞬間「ぐふっ」とラジカセの前でうめいてしまう。それはわたしの声だった。もちろんセリフだ。思わず停止ボタンに指をかけた。わたしはこのテープについてはつきりと思いついた。

このカセットテープは、アニメをもとにしてわたしと灰田さんで作ったオリジナルのオーディオドラマだった。シナリオは灰田さんが書いた。といっても内容は他愛ないもので、主人公少年のうち二人がコミカルな掛け合いを続けるだけだ。アニメのようなバトルシーンはなく、戦いの合間の平和な日常を描いたものだった。ラストの方ではなかば無理やりなBL的展開もある。当時はまだBLなんて言葉はなかったけれど。

停止ボタンに人差し指をあてたまま、しかし押すことはできなかった。いったん聞き始めたら、止めるタイミングがなかった。なつかしい、恥ずかしい、楽しい、悲しい、痛い――湧き上がるいろいろな感情がわたしの行動をすっかり封じていた。ラジカセの前に膝を抱えて座り込んだわたしは、スピーカーから流れる二人の少女の声を身じろぎもせず聞き続けた。

ドラマは十分ほどで終わった。最後はアニメのエンディングテーマが流れて、ゆっくりフェードアウトしていく。ブツツとノイズが入って、あとはまたテープの回転音だけになった。思わずほおっと息をついた。体がこわばっていた。さっきまでのテンションや気分はどこへ吹き飛んでしまったのか、きつと今日はもう何もできないという気がした。

テープは片面でまだ四〇五分残っていたが、スピーカーからは何の音もしなかった。このあとにも録音したものがあつたかどうかよく覚えていない。でもおそらく何も入ってい

ないだろう。そう思ったけれど、わたしは停止ボタンを押さずにいた。テープがただ回転するにまかせた。なぜすぐに止めなかったのだろうか？ 何かの予感でもあったのだろうか？ だとしたらその予感はあたった。

テープデッキの無機質な作動音をどれくらい聞いていたのか、気がつくとスピーカーからかすかな音が洩れていた。ハツとしてわたしは耳を澄ませた。しかし音があまりに小さくてよくわからない。ボリュームを少し上げてみた。するとそれは、やわらかい風に吹かれた木々の葉擦れの音のように聞こえた。でもやっぱりなんだかよくわからない。思いきって最大までボリュームを上げた。葉擦れの音ではなかった。人の話し声だった。

二人の女性が話しているように聞こえた。でも依然としてその声はかすかな音量で、しかもボリュームを最大にしているため機械的なノイズばかりが大きくなり話の内容ははっきりしない。そもそも声の主は誰なのか。灰田さんとわたしだろうか？ その可能性が高いと思うが、どうにも声質が違うような気もする。遠い記憶を探ってみても、ドラマのあとにこんなものを録音した覚えがない。

意識を集中して聞くと、ざわざわ、ぼそぼそという音声の合間に、「くだよ」「くだね」という語尾のあたりがかるうじて聞き取れる。もっとよく聞こうとして、わたしはスピーカーに耳を近づけた。すると「なあに？」と語尾の上上がった声がして、その間に答えるように、

「秘密だよ」

はっきりとそう聞こえた。

えっ、と思った次の瞬間、いきなり耳許でベチッと強い音がして、びっくりして飛び退いた。再生ボタンが跳ね上がった音だった。テープは終了していた。

わたしはそのあと、テープを巻き戻して何度もその部分だけ聞き直した。でも話の内容はどうしても聞き取れなかった。それでも「なあに？」という声の主が灰田さんだということはいつしか確信していた。声の調子や強弱、語尾に響く微妙な訛りがわたしの中に残る灰田さんの記憶に重なるのだ。とするともう一人の声、「秘密だよ」と答えたのは、やっぱりわたしなのだろうと思う。たとえ録音した記憶が失われていても。いくら自分の声のような気がしなくても。

二

灰田直子は転校生だった。中学二年の四月、熊本県の天草というところから、わたしたちの学校へやって来た。といっても春休みの間に転校してきたせいで、普通の転校生のよ

うな担任による儀式的な紹介もなく、一学期の初めからあたり前に教室にいたのだった。新しいクラスにわたしの知らない顔はたくさんあって、灰田さんもそのうちの一人に過ぎなかった。彼女が転校生だということすら、少しあとになって知ったくらいだ。

わたしたちの中学では、例年一学期の席順は出席番号順と決まっていた。わたしの席は教室のちょうど真ん中やや窓寄りのあたりで、灰田さんはそのひとつ前だった。授業中はずっと灰田さんのおかっぱの後頭部とセーラー服の背中が視界に入っていた。やせっぽちで、ちょっと猫背で、あまり身動きしない背中だった。

新学年が始まった最初の頃は、休み時間になると前のクラスで一緒だった子たちと固まって話をするが多かった。去年同じクラスだったというだけで、実際はそうでもなかったはずなのに、妙に親しく感じたものだ。

けれど灰田さんはいつも一人であった。転校してきたばかりだから一年のときに同じクラスだった子はもちろんいない。かといって、四月の初めからいるために転校生としての特別感もなかったので、クラスの一時的な話題にも上らず、誰からも話しかけられないままであったのだ。灰田さんの方でも、自分からクラスメイトと交流しようとする様子はまったく見られなかった。わたしは灰田さんのすぐ後ろの席にいながら、彼女の声をほとんど聞いたことがなかった。授業中、ごくまれに先生に当てられたときに、か細い震え声で答えるのを何度か聞いただけだった。イントネーションにほんの少し訛りがあった。彼女のささやくような声からは、なんとなくその訛りを恥じているような印象を受けた。

わたしも友達をつくるのは決して得意な方じゃない。それでも四月の終わり頃には、どうにかこうにか、昼のお弁当と一緒に食べる数人の仲間に入ることができた。クラス内の階層で言えば、真ん中かそれよりちょっと下くらいのグループだったと思う。リーダー格は倉本美樹という、話す内容の九割五分が光GENJIであとの五分がその他芸能ネタという、天然パーマで小太りの女の子だった。四限目が終わるとわたしたちは倉本さんの周りに集まった。倉本さんはお弁当を食べている最中もずっとしゃべり続けていて、わたしは適当に相づちを打ったり笑ったりしながら昼休みを過ごした。灰田さんはいえれば毎日一人で、小さなお弁当箱を隠すように抱えこんで黙々と食べていた。食事が終わるとすぐ立ち上がって教室から出て行き、長いこと戻ってこなかった。大抵はトイレで時間をつぶしていたようだ。教室に戻ってきてからは、残りの時間を机に突っ伏して寝ていた。あるいは寝たふりだったのかもしれない。

わたしがそんなふうには、ちらちらと横目で灰田さんの動向をうかがうようになったのはきっかけがあった。ある日の授業中、灰田さんの机の側板に吊られた通学カバンについているアクセサリーに気づいたのだ。それは透明のアクリル板に、青い英字でロゴだけが

書かれたシンプルなキーホルダーだった。イラストの類は描かれておらず、知らない人が見ればどこにでも売っているようなごく普通のキーホルダーに見える。でもわたしにはひと目でわかった。それは「サムライドラグーン」のキャラクター〈青龍のミヅキ〉のグッズに間違いなかった。学校に持っていきたいけれど周りには決してバレたくないという、ファンの心理に配慮した商品。わたしはその二年前に市の中心部に開店したアニメイト(アニメやマンガのキャラグッズ専門店)に足繁く通っていて、そのキーホルダーも何度も目にしていたので、すぐにそれとわかったのだった。

気づいた瞬間、ドキッとした。仲間を見つけて嬉しいというよりも、どうしてなのか、その時は困惑した気分になった。面食らってしまったのかもしれない。わたしは前年の秋に放映を開始した「サムライ」を熱中して見ていたけれど、ずっと一人で楽しんでいただけで、作品について人と話をしたことはなかった。アニメ雑誌の投稿欄やアニメイトに来る他校の女子たちの様子から、一部で「サムライ」が熱狂的なブームになっているのももちろん知っていたものの、自分の身の回りに、実際にファンがいるのを見たのは初めてで、びっくりしたのだ。世界がぐにゃっと、突然いびつに広がったような気がした。

ただ、最初に感じた戸惑いがやがて過ぎ去ってしまうと、今度は入れ替わるようにして、「灰田さんと話してみたい」という気持ちわたしの中にめばえた。それというのもの、お弁当グループの中ではどうしても馴染みきれないものをずっと感じていたからだろう。倉本さんたちの間でそれなりにうまくやっていたのはたしかだけれど、そのうちの誰かとたとえば放課後一緒に帰ったり、遊びに行ったりしたことは一度もなかった。「話を合わせている」という感覚が、ぬぐえないものとしてずっとあったのだ。

こっそりと灰田さんを観察する日々が続いた。あるときわたしは灰田さんのペンケース(これは一般の文房具店で売っていきそうな地味な商品だ)の中に、〈青龍のミヅキ〉のイラストが描かれた青いシャープペンシルを見つけた。ペンケースのフタが開いたときに一瞬見えただけだったが、わたしも家に同じシリーズの〈黄龍のハルマ〉バージョンを持っていたのすぐにわかった。灰田さんがそのシャープペンシルを使っているところは見たことがない。ペンケースの中に入れて持ち歩くことで満足だったのだろう。その気持にはすごく共感できた。でもわたしには、クラスメートに発見されるリスクを冒してまで、学校へ持ってくる度胸はなかった。

灰田さんと「サムライ」について話してみたい。そんな欲求だけが日に日にふくらんでいった。けれどそのタイミングはつかめないままだった。やがて季節は初夏に移り、梅雨に入る頃からだろうか。灰田さんは徐々に、ちょっとしたからかいや揶揄の対象にされるようになってきた。クラスの中で浮いた存在だった灰田さんがそうなるのは、きっと時

間の問題だったのだ。傍から見れば、別にいじめというほどのことでもなかった。でも灰田さん自身がどう感じていたかはわからない。自分が笑いのネタにされたとき、灰田さんはいつも口の端にうっすら笑みを貼りつかせて、赤くなってうつむいていた。

そういうポジションが確定しつつあった灰田さんに、みんなのいる前で話しかけることは、わたしにはどんな難しい行為に、ほとんど不可能な行為になっていった。

——ところが、機会は訪れたのだ。それは七月の半ば、期末テストが終わったあとの土曜日。あとは夏休みを待つだけの、気楽な午後だった。

学校が終わって帰宅したわたしはお昼ごはんもそこそこに、着替えだけ済ましてまた家を出た。自転車に乗って、二駅向こうにあるアニメイトへ向かったのだ。カンカン照りの強い陽射しをものともせずペダルを漕いだ。その頃のわたしには日焼け止めを塗るという発想すらなかった。

アニメイトの店内は、わたしと同じような夏休みを控えた中学生や高校生でいつも以上に混み合っていた。エアコンはフル稼働しているようだったが、満員電車並に密集する若者の熱気を冷ますには不十分で、女の子も男の子もみんなじっとり汗ばんでいた。あまり広くもない店の中、人ごみに流されるようにしながらわたしはぐるぐると周回し、並んだグッズを物色した。休み前の浮かれた気分のせいかな、商品棚はまるで宝石のショーケースみたいに輝いて見えた。普段は興味のない作品ですら、グッズを見ているだけで楽しかった。

店内をたっぷり時間をかけて何周かしたあとで、わたしは「サムライ」の新しく発売されていた下敷き（夕暮れのビル街を背景に、私服姿の五人がそれぞれ別の方向を向いて立っている）を手に取り、レジに並んだ。一台しかないレジには長い列ができていたけれど、わたしは下敷きのイラストを愛でて過ごしていたから待ち時間は気にならなかった。

そうして、いくらか列が進んだ頃だ。

「……えーと、お名前は……はいだ、なおこ様、ですね」

聞き覚えのある名前が突然耳に入ってきて、わたしは下敷きから目を上げた。声がした方、列の先頭を見る。レジの店員と客がやりとりをしていた。店員は客から小さな紙切れを受け取ると「少しお待ちください」と言って、カウンター奥の予約商品や取り置き品が並ぶ棚に向かった。

客はレジ前でじっと動かずに立っている。その細い背中とおかっぱの後頭部を知っていた。やっぱりあの灰田さんに間違いない。なんだかゴワゴワした感じの、格子縞のワンピースを着て、青いスニーカーを履いていた。

店員が商品を手にレジへ戻ってきた。CDだった。遠いのでパッケージはよく見えない

けれど、たぶんアレだろうとわたしには察しがついた。灰田さんは、待ってる間に用意しておけばいいものを、商品が来てからやっと財布を出して、もたもたとお金を払っていた。店員はCDを袋詰めするとき、カウンター下から取り出した紙筒を一緒に入れた。きつと予約特典のミニポスターだ。

灰田さんはアニメイトのロゴの入った袋をそのまま手に提げて店を出ていく。このチャンスを無駄にしてはいけないとわたしは思った。今話しかけなかったら、灰田さんと「サムライ」について話す機会はもうないだろう。でもそのときわたしの手には会計前の下敷きがあった。そしてわたしとレジとの間にはまだ数人の客がいる。二秒だけ迷った。それからわたしは敢然と列から外れ、下敷きを売場に戻すと、早足で出口に向かい、夏の日差しの中へ飛び込んだ。

周囲をキョロキョロと確認する。右手の歩道の先に灰田さんの背中が見えた。駅の方向に向かって歩いている。わたしは急いで自転車を出し、その背中を追った。土曜午後の街は人であふれていた。最近はあるあたりもずいぶん寂れてしまったけれど、八十年代終りの当時はまだ映画館や百貨店もあって人通りも多く、にぎやかな街だった。

何度も歩行者にぶつかりそうになりながら自転車を走らせた。それでも灰田さんの歩みはゆっくりで、追いつくのは難しくなかった。灰田さんの横に並ぶと、わたしはペダルから足を下ろし、

「灰田さん」

声をかけた。思いきる必要はなかった。自然と呼びかけることができた。でも灰田さんは止まらなかった。前を向いたまま歩道を歩いていく。聞こえなかったのだろうか。でもなんとなく、さつきより足早になった気がした。

「灰田さん！」

もう一度、今度は声を張り上げて呼んだ。灰田さんは立ち止まった。こっちを見た。一重まぶたの目に、怯えたような色が浮かんでいた。

「灰田さんだよな？ わたし、平野。平野めぐみ。同じクラスの。灰田さんの後ろの席の」説明する必要があるのかわからないけれど、とにかくわたしは説明した。灰田さんの表情が不審者を前にしたときみたいに見えたからだ。

「平野さん……」

ほとんど聞き取れないほど小さな声で灰田さんがつぶやいた。自分が認識されたことに少しホッとして、わたしは自転車から降りた。そして、何かを言おうとしたのだけれど、何を言えばいいのか急にわからなくなった。自分から声をかけておいて、「あの、ええと……」などとグズグズ言いよんでしまう。灰田さんは（当然ながら）戸惑った様子でわた

しの顔を見ていた。早く何か言わないとほんとに不審者になってしまうと焦って、結果、わたしの口から飛び出したのは、

「サムライ、好きなんだね」

というひたすら直球の言葉だった。でもよく考えてみれば、さっき灰田さんが買ったのが「サムライドラグーン」のCDだったのか、はつきり見たわけではない。もし違う作品のグッズだったら、わたしが普段から灰田さんを観察していることがバレてしまうだろう。ただこのときのわたしにはそこまで考えが及ばなかったし、結果的には、直球勝負をかけて正解だったのだ。

「……うん、好き」

まともにしゃべったこともないクラスメートからいきなり「サムライ」のことを言われ、びっくりして怪しむことも忘れたのだろうか。灰田さんから返ってきた言葉も、驚くほど素直なものだった。

「わたしも好きなんだ」

嬉しくなってわたしは言った。えっ、と灰田さんの口からかすかな声もれる。わたしは続けた。

「さっきアニメイトでCD買ってたでしょ？ わたしもいたんだ。あれって『SD5』エスデイトファイブのやつだよ？ 今日発売の」

「SD5」というのは「サウンドドラグーン5」の略で、「サムライドラグーン」の主演声優五人が結成した音楽ユニットだった。今では声優さんが顔出して歌を歌ったりするのはあたり前だけれど、当時そういうのは他になくて、彼らの存在は九十年代に起きる声優ブームのいわば先駆けだった。

「……うん。そうだよ」

灰田さんはまだ戸惑ってはいるものの、その表情はずっとやわらかくなっていった。口もとにはうつつすらと笑みも浮かんでいる。

「もう帰るの？」とわたしは訊いた。

「うん」灰田さんがうなづく。

「帰って何するの？」重ねてわたしは訊いた。もちろん今買ったCDを聞くに決まっているのに。けれど灰田さんの返答は、

「べつに……」

だった。

「じゃあヒマ？」とわたしは切り返す。

「うん……」

「お昼食べた？」

「食べてない」

「わたしも食べてないんだけど」嘘だった。「ロツテリア行かない？」

「でもさっきお金使っちゃったから……」

「おごるよ？」

わたしだけってお金に余裕があったわけじゃないけれど、今どうしても灰田さんを帰したくなかった。「サムライ」の話がしたかった。

「いいの？」

「うん、気にしないで」

「じゃあ、借りるだけ……」

——そんな風にちよつとナンパめいてしまったやりとりを経て、わたしと灰田さんは駅前のロツテリアに入ったのだった。午後二時を過ぎたところで、店内はやや混んでいたけれど座れないほどではなかった。二人とも一番安いハンバーガーと、わたしはペプシ、灰田さんはメロンソーダを注文した。トレイを持って二階へ上がり、窓際の席に向かい合って座った。窓からは駅前のロータリーが見下ろせた。市バスが次々とやって来ては客を吐き出し、また吸い込み、出ていくのを繰り返した。それを何回見たのかわからない。気がつけば窓の外は薄暗くなっていた。

わたしたちは夢中で語り合っていたのだ。ずっと前から友達だったみたいだ。

話し始めてすぐ、灰田さんは生き生きとした笑顔を見せるようになった。アニメイトの袋からCDを出してパッケージを開き、ブックレットを二人で見た。特典のミニポスターを広げると二人とも思わず歓声を上げた。好きなキャラクター、好きな場面、好きな声優さん……。いくらしゃべっても、「サムライ」の話は尽きることがなかった。灰田さんってこんなによくしゃべる人だったんだ、という驚きはもちろんあった。けれどわたし自身が、こんなにも「サムライ」について誰かと話したかったんだとあらためて気づかされ、驚かされた。

電車で帰る灰田さんを改札まで見送ってから、わたしは自転車で帰路に就いた。陽が落ちたばかりの蒼い夜の中をわたしは走った。ペダルを漕ぐ足は羽のように軽かった。もし人生で一番楽しかった日を挙げろと言われたら、わたしは迷いなくこの一日を選ぶだろう。

三

わたしは灰田さんのテープを聞き続けた。昼間から遮光カーテンを閉め切って、やや寒

いくらいにエアコンを調節してから夏布団にくるまり、枕もとに手を伸ばしてラジカセのスイッチを押す。中学生の灰田さんとわたしの声が流れる。最後にあのボソボソという話し声がしてテープが終わると、巻き戻してまた最初から聞く。それはわたしの毎日のルーティンになっていた。繰り返し繰り返し、聞いた。次に何をしゃべるのか完全に予測可能な二人の声を聞いていると、心がやすらいだ。

夫からは何の連絡もなかった。といっても、向こうの家を出た瞬間にスマホは着信拒否にしたしLINEもブロックしたので、連絡してくるとすれば固定電話にかけてくるか、手紙を出すか、直接おしかけて来るしかないはずだ。その可能性を考えると不安だったけれど、今のところどれもなかった。たぶんわたしが反省して頭を下げに来るのを待っているのだろう。プライドだけは高い人間だから。でもわたしは謝らない。二度と夫には謝らない。

母が夏風邪をひいた。灰田さんのテープを見つけて二週間が過ぎ、七月も終わろうとする頃だ。いつになく寡黙に朝ごはんを食べたあと、「めまいがする」と言って寝室へ入り、そのまま寝込んでしまった。

実家に戻ってから何もかも母にまかせっきりだったわたしは、久しぶりに家事のようなことをした。食事を作り、掃除をし、洗濯をし、買い物に行った。ただ少し工夫が必要だった。ベランダに出ているところを近所の人に見られたくないので、早朝に洗濯して干し、暗くなってから取り込んだ。買い物もそうだ。夜になってから、周囲に人影がないのを確認して、出かけた。

寝込んだ母は急に弱々しくなり、小さくなり、歳をとってしまったように見えた。ある夕方、おかゆを作って母の部屋へ運んでいくと、そのとき母は眠っていたのだけれど、わたしにはよその知らないおばあさんが布団をかぶって寝ているように本当に見えたのだ。た。

結構なショックだった。申しわけないという気持ちは今さらながらに湧いた。「なんとかしなきゃ」と、二週間前に思ったのと同じことを思った。前回の「なんとかしなきゃ」は、灰田さんのテープが出てきたせいで中断し保留になり忘れられていたのだ。でも今度こそ「なんとかしなきゃ」を実行しないといけない。わたしは自分を立て直さないといけない。

夜、スーパーへ買い物に行ったとき、入口のスタンドに置いてあった数種類の求人誌を持ち帰った。いきなりフルタイムで働くのはきついと思っていたので、ひとまずパートかアルバイトを中心に探した。でも、これといった資格も経験もない四十代の女が応募できる仕事は思った以上に少ない。ページをめくるほど気分が落ちこんでいく。三誌目になっ

てやっと、少し良さそうな募集を見つけた。カフェの店員だった。一日三時間、週二〜三日からOK。初心者歓迎。性別・年齢不問。この店は知っている。最寄りの駅近くに最近オープンしたばかりの大きなカフェだ。雑貨もあつまっているようで、一度入ってみてみたいと思っていた。あんな店で働いたら楽しいかもしれない。接客に自信があるわけじゃないけれど、若い頃にコンビニと居酒屋でバイトした経験ならある。

翌日の昼前、緊張しながら電話をかけると、応対したのは若い男性の声だった。やわらかい感じの声で、少し安心する。求人誌を見た旨を告げると、面接をしたいので今日四時に来れますかといきなり訊かれ、思わず「はい」と答えてしまった。電話を切ってから、焦った。

慌てて一番近いファミリーマートに行き履歴書を買って、店頭の証明写真のボックスに入った。画面に映った自分の姿を見て、しまった普段着だ、ブラウスでも着てくればよかったと後悔したけれども遅い。そのまま写真を撮って家に戻った。四枚セットの履歴書の三枚までを書き損じてごみ箱に放り込み、最後の一枚でやっと書き終え写真を貼った。パートの面接だしあまり堅苦しい格好をしていくのも変だろうと考えて、できるだけ小綺麗な私服を選ぼうとしたのだけれど、何を着ても納得がいかず、何度も何度も着替えた。そんなことをしているうちに面接時間が近づいてきて、結局は一番初めに着た服をまた着て、鏡の前で顔と髪をいい加減に整え歯みがきをして家を出た。

時間に追われたわりに、店に着いてみるとまだ予定時間の十五分前だった。ちよつと早過ぎる気もしたけれど、遅くなるよりはと思ひ、中に入ることにした。入口のドアはどつしりした木製で、押し開けるのにとっても重く感じた。

「いらっしやませー！」と複数の声が矢のように飛んできた。どれも女性の元気な声だった。無意識に小さく会釈を返す。近くにいた店員が笑みを浮かべながら寄って来た。カフェの店員というより美容師に似そふな感じの、若い女性だった。「何名様でしようか？」と訊かれ、「あ、四時に面接予定の、かきうち垣内」といいます」と答えた。女性の笑顔は、客向けではない微妙なものに変化した。「あー、ちよおつと、お待ちくださいねー」と、カウンターの奥の、開けっ放しのドアの中に入っていく。と、「えっ、もう来たの？」と奥から男の声がはつきり聞こえて、お腹の底が重くなった。

美容師みたいな女性はすぐに出てきて、「どうぞー」と奥のドアへわたしを招いた。わたしは店内を横切ってカウンターの方へ向かった。店は全体にログハウスをイメージしたような内装になっていて、いかにもおしゃれだった。時間帯のせいなのか客は多くない。カウンターの内側には店員が二人いて、どちらも二十代前半に見える女性だった。二人ともてきばきと手を動かして仕事をしている。二人同時にわたしの方をちらりと見た。笑顔は

ない。何か不思議なものを見るような顔をしている。その表情が双子のようによく似ていた。気圧されて「失礼します」と言ったわたしの声がかすれた。わたしは頭を下げながら二人の横をすり抜け、開いたドアから奥へ入った。

中は事務所になっていた。店内との落差に面食らうほど、狭く雑然としている。積み上がった段ボール箱に囲まれるようにしてスチールのデスクがあり、その向こうに男性が立っていた。細身のスーツを着てメガネをかけた、ひよろりと背の高い男だ。年齢は三十歳くらいか、もしかするともっと若いかもしれない。ジェルか何かで固めた髪が、蛍光灯の青白い光にテカテカと光っている。

男が先に何か言うだろうと思い、待った。といっても二秒か三秒の間だ。けれど男は何も言わず、突っ立ったまま無表情にわたしの顔を見ている。自分がしゃべらなきゃならぬのだとわたしは唐突に悟った。

「あ、えと、先ほどお電話しました、垣内めぐみといいます」と言った。そしてまた男の言葉を待った。でも、男は沈黙したままだ。メガネの奥の小さな黒い瞳がじっとわたしを見つめていて、怖くなってわたしは目をそらした。

「あの、本日は面接の方、よろしくお願ひします」と、なんとかそれだけ言葉を続けた。その直後、変な声が出た。「はー」と「ほー」の中間あたりの、空気の抜けるような音だ。そらした目を男の顔に戻す。男は小首をかしげて長く息を吐き出していた。笑えない冗談でも聞いたみたいに口を歪めている。ため息に似ているけれど、まさかと思った。初対面で何も言わずいきなりため息をつく人間がいるだろうか。

「……はい。おかけくだ、さい」

男はやっと言葉をしゃべった。電話で聞いた声に似ていた。変なところで語を区切って、人をからかっているような、というか、人をからかうという行為を真似ているようなしゃべり方だった。この時点で、さっきのはやっぱりため息だったんだとわたしは確信していた。

「はい」と答えて、わたしはパイプ椅子の背に手をかけた。男は立ったまま動かない。こういうときは相手が座るのを待った方がいい気もする。わたしがそのまま座るのを躊躇している、と、

「いやいや、どうぞ？」

明らかにイラッとした感じに笑いながら男が椅子を手で示したので、「失礼します」と言っただけは先に座るしかなかった。男がじっとわたしの動作を見つめているせいで、椅子に座るだけのことをひどく難しく感じた。

わたしがぎくしゃくと座るのを見届けると、男はデスクの向こう側の椅子に素早く腰か

け、「店長の〇〇田です」と早口で言った。「沼田」なのか「村田」なのか聞き取れなかった。「ではまず書類を拝見します」と続けた。

書類、という言い方に少し戸惑ってしまう。わたしはバッグから履歴書を出し、両手で男に差し出した。男はそれをデスクに置いて、無言で眺めていた。店の方から聞こえる客の声や、コップや皿のカチャカチャという音が、妙に遠く感じた。一分くらいそうしていただろうか。

「えーっと」男は履歴書から目を上げて、言った。「職務経歴書の方は？」

「あ、えっ、職務経歴……」もちろんそんなものは持っていない。履歴書を書くだけで一杯だったし、パートの面接にそこまで要求されるなんて思いもしなかった。

「……あの、すいません、今までの仕事の経歴は、履歴書の方に……」

「いやいや、それはあたり前ですけど」と男はまたいらついた笑みをもらす。「職務経歴書はご用意されてこなかったと？」

「あ、はい。すいま……」

「了解です」

謝ろうとするわたしを男は妙に軽い調子でさえぎった。また履歴書に目を落とし、ボールペンで何かを書きこんでいる。わたしはもういたたまれない気分だった。

「はい。では、ですねー」

言いながら、男は履歴書をふたつに折って脇に寄せた。デスクの上で両手を組み、再びわたしを正面から見据える。そして突き放すように冷たい口調で続けた。「今から二分間で、自己PRをお願いします」

またしても想定外の要求だった。

「あ、自己PR……はい……」

頭が真っ白になった。長所短所くらいなら訊かれるかもしれないと思って考えてきたけれど、「自己PR」なんてわたしにはハードルが高すぎた。それに男の言い方、とくに「二分間で」という部分になぜかとても攻撃的なものを感じて、心臓がグツと苦しくなった。

男は着けていた腕時計を外す。それを、わたしに見えるようデスクの上に置いた。

「秒針が真上に来たら始めてください」と言う。何を始めるんだっけと思った。そうだ、自己PR——。

「……はい、始め！」

男がいきなり今までと違う野太い声を上げて、パン、と音高く手を打った。何かの試合開始みたいだったけれど、その感じを面白がる余裕はもろんなかった。わたしは何も言えなかった。「あの」や「えっと」すら言えず、完全に沈黙してしまったのだ。言葉が見つ

からないというより、声そのものが出ないのだった。

「どうしましたか？ 始まってますよ」と男は急かす。「ハイ！」また手を打った。それでもわたしはしゃべれない。かろうじて「……あ……」という声が出た。でもその声はわたしにしか聞こえなかったようだ。

男はおもむろに両腕をわたしの目の前五センチくらいの位置まで伸ばしてくると、今度は何も言わず、ふたつの手のひらを思いきり打ち合わせた。バチン！ と耳が痛くなるほど大きな音が出た。犬だ、とわたしは思った。試合なんかじゃない。これは犬に芸をさせるときの合図だ。

「……わたしは、」とわたしは言った。やっと言葉が出た。でもそれで終わり。またわたしは黙ってしまふ。言うことを全然思いつかなかったわけじゃない。けれど話を続けられなかったのは、それ以上しゃべると泣いてしまうのが自分でわかったからだだった――。

「……はい、終了です」と言って男が腕時計を取り上げた。もう二分経ったのだろうか。つらい時間は遅く感じられるはずなのに、わたしには時間が跳んだように思えた。それとも途中で打ち切られたのか。わたしにはわからない。男は時計を手首に巻き直しながら「わかりました」とつぶやいた。男は何をわかったのだろう。それもわたしにはわからない。

帰り道、ひどく疲れてしまって脚に力が入らず、ゆらゆらと自転車を漕いだ。スーパーに寄ろうと思っていたのに、それもやめた。今は人が大勢いる場所に行きたくなかった。「採用の際はまたお電話します。二日以内に連絡がなければ、まあ、そういうことだと思ってください」と店長の男は最後に言った。もちろん電話を待つまでもない。「そういうこと」だ。

時間はまだ五時前だったけれど、空は厚い雲に覆われていて、夏の夕方にしては薄暗い。雨が降るかもしれないな、と思った。そのとき、口の中がカラカラに渴いていることに初めて気がついた。

走るうち、左手に神社の鳥居が見えてきた。そうだ、あの鳥居を過ぎたあたりに自販機があったはず。あそこで飲み物を買おう。果糖たっぷりの炭酸飲料がいい。

通りを外れて、神社の前へ行った。子供の頃、縁日や初詣にここへ来た。小さな神社だけれど、特別なイベントのある特別な場所だった。今ではもうなんでもない。日常生活のただの背景に過ぎない。

鳥居の前を通り過ぎ、玉垣に沿って進むと、角のところに自販機はまだあった。昔はコカ・コーラの自販機だった。今はよく知らないメーカーの安売り自販機に変わっている。そこに自転車を停めて、メロンクリームソーダを買った。ペットボトルのラベルには、半

球状のアイスクリームを浮かべた緑色のグラスの絵とともに「なつかしい喫茶店の味」とプリントしてある。もう少し人目につかないところで飲もうと思って、わたしは神社の横手の、路地のようなになった細い道に自転車を押して入った。道の中ほどで立ち止まり、キヤップを開けひとくち飲む。思っていた以上にちゃんとクリームソーダの味がして驚いた。やっと息ができるようになった気がした。境内の方でカラスがしきりに鳴いているのが聞こえた。

灰田さんと親しくしていた中二の夏、この道をよく通った。灰田さんの家へ行くのに、この路地を抜けるのが近道だったのだ。神社の向こう側は古いアパートや長屋の密集したせせこましい地域で、その中に灰田さんの家もあった。

——あの家はまだあるのだろうか？

考えてみれば、もう長いあいだあの辺には行ってない。最後に近くを通ったのはいつだったのか。実家からそう遠くもないのに、現在のあの界限の姿をわたしはまったく知らなかった。

一度思いつくと、見に行ってみたいという気持ちが衝動的に湧き起こった。せっかくなこまで来たのだから、もう少しだけ足を伸ばしてみたっていいだろうと思った。結局メロソードは三くちくらいしか飲まず（ひとくち目はあんなにおいしかったのに、それ以上飲んだら気分が悪くなりそうだった）ペットボトルにキヤップをして、わたしは再び自転車にまたがった。

路地を抜け、神社から少し離れると、周囲はすぐに見覚えのない風景になった。わたしは本当に何十年もこの地域に立ち入らなかつたらしい。道の狭さは相変わらずだけれど、目印として思い描いていたような建物はあらかた存在せず、低層マンションや駐車場に変わってしまった。曇天の下、キョロキョロと周りを見ながら、不思議な思いで自転車を漕いだ。するとだんだん方向感覚まで怪しくなってくる。まるで知らない町に迷いこんだみたいだった。時間帯のせいだろうか、一応は住宅街のはずなのに、人の姿が全然ない。どこかの家の開いた窓からテレビの音が漏れてくるだけで、町は奇妙に静かだった。

ある角を曲がったところで、やっと記憶にある建物を見つけた。郵便局だった。造りはそのままだけれど、くすんだねずみ色だった外壁は変なピンク色に塗り替えられていて、それもすでに汚れてくすみ始めていた。表のシャッターは閉まっている。いつの間にか五時を過ぎていた。ここにも人影はない。灰田さんの家はこの郵便局の近くだったはずだ。

郵便局の隣には当時、小さな畑があって、その縁のあぜになった未舗装の道を通って灰田さんの家に行った。今は畑はなくなっていて、コンビニのような平屋の店舗がある。コンビニの「ような」というのは、その店舗が空き店舗だからだ。ほこりっぽい自動ドアに

「閉店のお知らせ」という貼り紙があり、自転車を停めてよく見るとその日付は四年も前のものだった。

わたしは空き店舗の敷地を横切り、店の裏側へ出た。この先で道は二股に分かれていたはずだ。右の道はすぐ行き止まりになるのだけれど、その手前に二階建て住宅が四軒つながった長屋があつて、端っこの一軒が灰田さんの家だった。

ゆっくりと道をたどるうち、記憶の中の風景と目の前の景色とが、徐々に重なってくるのをわたしは感じた。このあたりは、建て替えや再開発のようなことがあまりおこなわれなかったのだろうか。二股の分かれ道までやってくる頃には、過去と現在の差がほとんど目につかないくらいになっていた。

右の道へ折れる前から、わたしは確信していた。灰田さんの家は、まだある、と。そしてその確信は、裏切られなかった。灰田さんの家は、たしかに、まだそこに、あつた。

二階建ての長屋は、わたしが中学生の頃すでに築何十年も経つ古びた建物だった。今、さらに歳をとってわたしの前に現れたその建物は、外壁にいくつもひび割れが走り、モルタルの一部も剥落していて、ちょっと大きな地震でも来ればひとたまりもないように見える。

つながった四軒のどの家にも、人が住んでいる気配はなかった。左端の灰田さんの家だったところも、玄關の表札が外されていて、その部分だけ四角く白くなっている。

わたしは自転車がまたがったまま、片脚を地面につき、灰田さんの家を眺めた。玄關は格子のはまったガラスの引き戸だ。立て付けが悪いのか開け閉めするときいつも不快な音がしたことを思い出す。中は見えない。ただ黒々とした闇が、ガラス扉の奥にわだかまっている。もちろん人が住んでいるわけがないのだ。あんな暗いところに、人が住めるわけがない。それにしても――。

どうしてこんなに暗いのだろうとと思って、空を見上げた。と、少しのあいだに雲はさらに厚みを増していた。黒く暗く、天を覆っている。いつ雨が降り出してもおかしくない。

わたしは何を期待してこんなところに来たのだろうか？　ここで何を見たかったのだろうか？　突然の疑問がわたしをとらえた。それはかすかに怒りの混じった問いだった。灰田さんの家が残っていたからといって、それが何だというのか。こんな廃屋を前にして。わたしは。

帰ろうと思った。自転車をUターンさせた。走り始めた。分かれ道まで戻る手前で、ふと停まった。無意識だった。あるいは意識的だった。理由はなかった。理由はあった。わたしは振り返った。灰田さんの家の、二階の窓が目に入った。

すりガラスの向こうに、人影があつた。長い髪をした、細い影。女だろうか。暗い窓に、

そこだけぼおっと、灰色の人の形が浮かび上がっている。

あの影は、わたしを見ている。さつきからずっと、見下ろしていたのかもしれない。なぜ、視線に、気づかなかったのだろう。こんなにも、強い、視線に――。

そのとき、雨が降り出した。下界の者たちを殺すつもりで叩きつけてくるような、猛烈な雨だった。雨粒が目に入って思わずまばたきした次の刹那、もう窓の人影は消えていた。そこには真っ黒い井戸の底のような暗闇があるだけだった。

影は奥に引っこんだのか。それともそんな影自体、目の錯覚だったのか。わたしにわかるはずもない。わたしはしぶ濡れになりながら、家路を急いだ。

四

夏休みに入ると、わたしと灰田さんは毎日のように会った。基本的にインドアな二人だったので、会うといってもほとんどはおたがいの家を行き来して、部屋の中で一緒にマンガを読んだりテレビを見たり、ただ話をしたりしていただけたけれど、それでも毎日が楽しかった。誰かとこんなにも急速に親しくなったのは初めてだった。

でも灰田さんの家に最初に上がったときには、わたしはまず「暗い」という印象を受けたのだ。カーテンを閉めきって電気もつけないでいたからだ。「お母さんが寝てるから」と灰田さんは小声で言い、短い廊下の右手にある障子戸を指した。あとからわかったことだが、灰田さんのお母さんは夜の仕事をしていた、昼間は寝て夕方になると出かけるのだった。

手すりのない急な階段を昇った二階に灰田さんの部屋があった。一階に比べれば少しは明るかったものの、もともと陽の入りにくい造りのようで、窓を開けていてもどこか薄暗く、昼間から電気をつけないといけない部屋だった。六畳くらいの和室で、畳は古びて毛羽立ち、砂壁はところどころ削れて色が変わっていた。ただ物が散らかっていたことは一度もなく、部屋はいつでもきれいに整理されていて、古壁の見苦しさをカバーするかのよう「サムライ」のポスターが何枚も貼ってあった。壁際に並べられたカラーボックスには本がぎっしり詰まっていた。ほとんどはマンガだった。あとはコバルト文庫が少しと、子供の絵本のようなものも数冊あった。十四インチの古いテレビがあったがビデオデッキはなく、小型のCDラジカセが畳の上にじかに置かれていた。窓のそばにはオレンジ色の学習デスクがあり、側板の一面に幼児向けアニメやマンガのシールがベタベタと貼られていた。シールはすべて褪色して白っぽくなっていった。

昼間は寝ているはずのお母さんは、わたしと灰田さんが部屋にいと、たいてい一度は

起きてきて、ジュースやお菓子を出してくれた。不機嫌そうな様子もなく、いつもニコニコしていた。「直子にいいお友達ができて嬉しい」と何度も言った。そういうとき灰田さんは恥ずかしそうにうつむいていた。灰田さんによく似た、平たい顔に細い目をした地味な雰囲気のおばさんだったけれど、一度だけ、夕方仕事に出かけるところを見たときは、ぼつちり化粧をして目も大きくなり、全然知らない人のようにきれいだった。

灰田さんのお父さんを見かけたことはなかった。日曜日に灰田さんの家に行ったときもいなかった。灰田さん自身も父親について何も言わなかったので、わたしも子供なりになんとなく察して、そのことは聞かないでおくことにした。

灰田さんは、前に住んでいた熊本の話もしたがらなかった。わたしが天草という土地について持っただひとつの知識である天草四郎について話を振っても、灰田さんはひとこと「……うん、よく知らない」と答えただけで、すぐにほかの――アニメやマンガの――話に移った。わたしたちはあまり現実生活に関わる話をしなかった。話題にするのはもっぱら「サムライドラゴン」を始めとするフィクションの作品やキャラクターのことばかりだった。でもそれをとくに変だとか不健康だとか思わなかったし、今でも思わない。話は尽きなかったし、楽しかったし、そういう話題だけで十分だった。

そんな二人のつきあいだったけれど、さすがにどちらかの家にこもりつきりだったわけではなく、ときどきは外へ出かけることもあった。行き先はだいたい決まっていた、アニメイトか本屋か図書館だった。あの夏は本当に暑い夏だった。毎日毎日が快晴で、雨の降った記憶がない。容赦なく照りつける陽射しの下、灼けつくアスファルトの道を、二人並んで自転車に乗った。走っているあいだも、おしゃべりが止むことはなかった。

――図書館でカセットブックを借りたのは、八月の初め頃だったと思う。当時、角川書店が若者向けの小説（今でいうライトノベルに類するもの）をオーディオドラマ化し、カセットテープで販売していて、それをカセットブックといった。藤川桂介の「宇宙皇子」や田中芳樹の「アルスラーン戦記」なんかがラインナップに入っていて、おもに男の子を対象にしていたようだが、わたしたち二人は妄想の燃料になりそうな作品なら男子向けだろうと女子向けだろうと別け隔てなく摂取していたので、行きつけの図書館にまとめて何本もカセットブックが入荷したのを見つけたときに喜んで手にとったのだ。

わたしたちが借りたのは「ロードス島戦記」というファンタジー作品だった。二人とも原作本は読んでいなかったけれど、剣をかまえた騎士や金髪のエルフが描かれたパッケージイラストがとても美しく興味を湧いた。二人して「いいね」「いいよね」とか言い合っていてイラストをウツトリ眺めたりしたあげく、わたしの図書館カードで借りることになった。

灰田さんの部屋に行ってラジカセでテープを聞いた。が、内容そのものについてはあま

り面白いと思わなかった。というのも、長編一冊の物語をA面B面合わせて六十分弱のドラマにするために相当はしょっているらしく、唐突な展開や説明不足の部分が多くて、二人とも話がよく理解できなかったからだ。

ただ、わたしたちは違う面において大きな感銘を受けた。それは、画がなくても、音だけでこれだけの表現ができるのかという驚きだった。目を閉じて聞くと、自分の周りにファンタジーの世界が広がる気がした。キャラクターたちがすぐそばにいるみたいだった。全体のストーリーがよくわからなくても、場面場面は生き生きとして、スリリングで、今まで知らなかった楽しさにあふれていた。

音だけで創り上げられた異世界。音楽、効果音、声。どれも大事な要素だけれど、わたしたちの心にダイレクトに刺さったのは、やっぱり、なんといっても、声だった。声の魅力。役者陣には「サムライ」に出ている声優さんも何人かいて、そんなところもわたしたちを興奮させた。

テープが終わってから、わたしたちは作品に出てきたセリフを声真似して遊んだ。わたしの声はその頃から女の子にしては低かったのも、主人公の少年騎士の声をやった。灰田さんは相手役のエルフ少女。他愛もない遊びだったけれど、楽しかった。わたしが何か言うたび、灰田さんは、

「平野さんの声って、いい」

「男の子の声、かっこいいね」

「うらやましい、ほんとの声優さんみたい」

などと、しきりにわたしの声をほめてくれた。気恥ずかしかったけれど、もちろん嬉しくて、いい気になった。

それから、わたしと灰田さんのあいだでちょっとしたブームが発生した。音読ブームとでもいうべきだろうか、何でも声に出して読むのが流行ったのだ。部屋にあるマンガとか小説のいろんなセリフを、声優さんっぽく声をつくって読み合った。セリフだけではなく、ときには地の文もナレーションとして音読した。

そんなブームがあって、一週間くらいした頃だろうか。ある日、灰田さんの家に行くと、「ねえ平野さん、見て」

といきなり言われ、灰田さんから一冊のノートを開いて見せられた。各ページに薄く花模様の入ったかわいいノートだった。灰田さんの小さく丸っこい特徴的な文字がびっしり書きこまれていた。

「どれどれ」なんて言って手に取り、読み進めるうち、それが「サムライドラグーン」のオリジナル小説だということがわかってきた。戦いの合間の平和な時間を、主人公たち五

人のコミカルなやりとりで描く内容で、三ページ半くらいの短いものだった。

「これ、灰田さんが書いたの？」

読み終わって訊いたら、

「うん。わたし。書いた」

カタコトみたいな言葉が返ってきた。見ると、よほど恥ずかしかったのか、灰田さんは真っ赤な顔をしている。

「すごいね、灰田さん、小説が書けるんだ」

わたしは、いつも自分の声をほめられるお返しに、ここぞとばかりにほめてあげるつもりで言った。けれど灰田さんは、

「いいの！ ほめなくていいのそうじゃなくて」

慌てたみたいにわたしの言葉をせき止めたかと思うと、

「……これをね、平野さんに、声に出して読んでほしいの」

今度は消え入るような小さな声で言った。そこまで恥ずかしがるようなことだろうかと思しき不思議に思ったけれど、灰田さんらしい気もした。

「うん、いいよ」とわたしは軽く答えた。お安い御用というか、得意の仕事を一件請けましたみたいな感じで、気分がよかった。

本職の声優さん気取りでかたわらのジュースを取り口を湿らせ、けほん、と咳払いまでしてから、音読を始めた。ところが声に出して読んでみると、五人の登場人物がみんな年なので、演じ分けが難しい。できるだけお腹から声を出すようにした。その方がつやのある声が出ることが経験的にわかってきていた。この頃になるとわたしは、灰田さんのお母さんが怒らないのをいいことに、大きな声を出すことにあまりためらいがなくなっていたのだった。

最後まで音読すると、灰田さんは興奮した様子で「すごい。平野さんすごい」とわたしの演技をいつも以上にほめちぎってくれた。でもわたしとしてはうまくセリフを言えなかったように感じていた。それはやっぱり五人をわたし一人で演じるのにどうしても無理があったからだ。

「だめだー、全然うまく言えなかった」

「えー、そんなことない。上手だったよ」

「だめだめ。やっぱ一人で五人は難しいよ。ねえ灰田さんも一緒にやってよ」

「わたし、少年声はできないから……」

「できるよ。ほら、ミヅキだったらほとんど女の子みたいなものだし」

それから小一時間、二人で音読して遊んだ。〈青龍のミヅキ〉のセリフだけは灰田さんに

言わせたものの、あとの四人は結局わたしが読んだので全体としてはあまり変わらなかった。でも灰田さんのミヅキ役は本人が謙遜するほど悪くなかった。かわいかったし、凛々しい雰囲気もあった。

「わたし、これ、ちょっと書き換えてみようかな」

同じセリフの言い合いにも飽きてきた頃、灰田さんがぼつりと言った。

「書き換える？」

「うん。登場人物を二人に減らして、話を少し変えて」

「そんなことできるの？」

「できると思う。ハルマとミヅキだけの話にするの」

ハルマというのは〈黄龍のハルマ〉で、わたしの一番好きなキャラだ。

「その方が二人で読みやすいでしょ？」

「うん、そうだね……」とわたしはそのことについて少し考えてから、あることを思いつき、「じゃあさ、じゃあさ」と続けた。

「それだったらさ、小説じゃなくて、ドラマの脚本にしてよ」

「脚本？」

「ほら、カセットブックみたいなの。録音して、二人で作ろうよ」

灰田さんの口がアツと驚いたみたいに小さく開いた。その反応を見たときに初めて、わたしは何気なく言った自分のアイデアの素晴らしさに気がついた。

——わたしたちでカセットブックを作る。

つまり自分たちの声を録音するということなのだけれど、あれだけセリフを言ったり音読したりしていたのにどうして録音という単純なことをそれまで思いつかなかったのか、考えてみれば不思議だった。そしていったんアイデアが浮かんでみれば、すぐにやってみたくてたまらなくなった。

灰田さんも同じ気持ちだったらしい。あつという間に書き直して、二日後にはもうドラマ脚本の形にしていた。もちろん中学生の女の子が初めて書いた脚本なのだから、体裁の整ったものではない。けれどわたしたち二人にとっては十分よくできた台本だった。

灰田さんの部屋で台本を見せてもらって、二人で何度か練習のための読み合わせをした。それからいよいよ、前日に買っておいた新品のカセットテープのパッケージをむき、ラジカセにセット。ドキドキしながらわたしが録音ボタンを押したのだけれど、ここからがけっこう大変だった。外を走る車の音やクラクション、突然の子供の歓声、さらには灰田さんのお母さんが差し入れを持って上がってきたりと、とにかく次から次に邪魔が入り、録音はそのたびに中断、最初から録り直しになってしまうのだ。それに、わたしたちは指向

性のマイクを持っていなくて、ラジカセ本体にもとからついているマイク部に顔を寄せてしゃべっていたから、今度こそアクシデントもなく録音できたと思って最初から聞いてみると、台本をめくる音や畳を足がすった音など、本体マイクは意外といろんな音を拾っていて、結局ダメになることもあった。それでもわたしたちはめげず、テープを巻き戻しては始めから録り直すことを続けた。ずいぶん根気強かったものだとも思うけれど、何かアクシデントが起きるたび二人で「わちゃー」と言って倒れたり、泣き真似をしたりと、それはそれで楽しんでいたのかもしれない。

そんなわけで、午後早くに始めた声録りは思いのほか時間がかかり、一応納得がいく状態で録音が終了したときにはもう夕方になっていた。

あとは音楽と効果音を入れたら完成だ。音源は、アニメの放送を録音したものがあるのでもそこから借用するつもりだった。ただ、その作業にはわたしの家のダブルカセットデッキが必要なので、ひとまず今日録ったテープはわたしが家に持ち帰ることにした。

帰り際、玄関まで灰田さんに見送ってもらった。灰田さんのお母さんはそろそろ仕事に行く準備をしているのか、一階の部屋には明かりがついていた。「お邪魔しましたー」と奥に声をかけて外へ出た。

太陽は沈みかけていて、町はオレンジの光に包まれていた。気がつけば八月も半ばに差しかかっている。一日ごとに日は短くなっているんだとわたしは実感し、少しの寂しさと、奇妙な焦りのような感情を覚えた。

自転車に乗って、郵便局の前まで戻って来たときだった。

「すみません」

すぐそばから声をかけられ、ブレーキをかけた。歩道に男が立っていた。

「すみません。ちょっとお聞きしたいんですけど」

飛び抜けて背の高い男だった。ずいぶんやせて見えるのは、体に合わないブカブカの背広を着ているせいだろうか。背広にはたくさんしわが寄っていて、ネクタイはしていない。わたしは目を上げて男の顔を仰ぎ見た。小さなレンズのメガネをかけていた。鼻の下とあごにまばらな髭があった。

「はい？」とわたしは応じた。やや硬い声になった。男の言葉は丁寧だったけれど、声が大きいのと、上から見下ろされているためか、威圧されるように感じたのだ。

「このあたりに、灰田という家はありませんか？」と、男は言った。

「え、灰田さん……」

急に友達の名前が出たのでびっくりした。でもどう答えればいいのかわからない。この男は誰なんだろうと思った。

「ああ、ぼくね」男はわたしが迷っているのを見抜いたようで、安心させようと思ったのか、口角を上げて笑みらしき表情を浮かべた。「ぼく、灰田さんとこの、ええと、親戚なんだけどね」

そう言われてみれば、たしかに男の言葉のイントネーションには灰田さんと共通する訛りがある。

「このあたり、来たの初めてでね」

「あ、はい」

「熊本から出てきたんだけど。天草ってどこ。知ってる？」

「……知ってます」とわたしは答えた。べつに変な人じゃなさそうだと判断した。「あ、灰田さんの家なら——」

道を教えてあげると、男は「ありがとね」と礼を言って歩き去った。ところが、灰田家の方へ向かう男の後ろ姿を見ていて、わたしは何か妙な感じを受けたのだった。そのときは違和感の正体に気づかなかった。家に帰り着く頃になってやっとわかった。

男は手ぶらだったのだ。小さなカバンひとつ持っていなかった。背広を着た大人の男が手ぶらで町中を歩いている時点で少し奇異な感じがするものだけけど、熊本から出てきたところならなおさら変だ。

——本当に教えてよかったんだろうか？

不安な気分がわたしの中に広がっていった。

五

いつものように日が暮れてからスーパーへ買い物に行ったら、自転車置き場の壁に「パートさん急募」の貼り紙を見つけた。「レジ係・経験不問・詳細お気軽におたずねください」とある。

ここなら通いやすい。店員にも年配の人が多く、仕事も難しくなさそうだ。でもどうしようか迷った。またこの前のカフェの面接みたいな嫌な目にあいたくない。

どうしよう、どうしようと、毎日を鬱々として過ごした。決心がつくのにもまる一週間かかった。翌週の同じ曜日、今度は明るいうちにスーパーへ行き、あまり忙しくなさそうな店員を探した。みんな忙しそうに見えて、話しかけるのに気後れした。無駄にウロウロして足が疲れてしまい、一瞬帰ろうかと考えたりしたけれどぎりぎりで思い直し、もうどうでもいいやと思って、とうとうか「もうどうでもいいや」と思うことにしようとかんばって、そのとき近くでカップ麺を並べていた五十代くらいの女性店員に向かって「すみません。

パート募集の紙を見たんですが」と考え抜いたセリフを口にした。

そこから先はトントン拍子に進んだ。まるでわたしが思いきって話しかけるのをみんなで待っていてくれたみたいだ。

面接の心配は杞憂に終わった。相手は売場の責任者だというぽっちゃりした女性で、わたしと同年代に見えた。提出した履歴書にはチラリと目をやっただけで、ほとんど読みもしなかった。答えに困るような質問もされず、基本的なことについて少し尋ねられただけで、その場で採用が決まった。

「いつから来れますか？」と訊かれて「明日からでも大丈夫です」と答えると、「すごいね、やる気まんまんね」と責任者の女性は笑った。人好きのする、感じのいい笑顔だった。わたしも笑みを返した。自分の中に築いていた警戒心が急速に薄れていくのを感じた。

「えー、昭和五十年生まれかあ。わたしと同じ年なんだ」

このときになって女性は初めて履歴書をちゃんと見たようだった。それをきっかけに、少し雑談した。わたしが今は実家暮らしだと話すと女性は、

「あれ、じゃあ昔からこの辺なの？」と小さな目を見開いた。「中学はどこ？」

「五中です」

「うそー、わたしも五中だよ？」

「そうなんですか？」

同じ中学、同じ学年と聞いて、急にみぞおちのあたりが冷たくなった。この話はここで終わりにしたかった。でももちろん無理だった。

「あー！」

責任者の女性は、だしぬけに声を上げ、わたしの顔をまじまじと見つめた。

「垣内さんって、もしかして、中学二年のとき、一組じゃなかった？」

「え？ はい。一組でした」

「だよね！ ……あのさ、間違ってたらごめんね。ひよっとしてあなた、平野さん？」

わたしはうなずくしかなかった。

「旧姓は、平野です。平野めぐみ」

わたしが言い終わらないうちに、

「やっぱりー！」興奮して女性はわたしの手を握った。「メグだ！」

握られた手をぶんぶんと振り回されながら、わたしは記憶の中に相手の顔を探した。答えが見つかる前に、女性は言った。

「わたしだよわたし。倉本。倉本美樹。お昼ごはん、毎日一緒に食べてたー」

テープを持ち帰った翌日は灰田さんに会わなかった。わたしは自室にこもって、音入れ作業に没頭した。もともと機械オンチなので、まずはCDラジカセの説明書とにらめっこすることから始めなければならなかった。その頃はまだ部屋にエアコンもなかった。扇風機を最大風量にしても暑さはしのげず、シャツの下を流れ落ちる汗の不快さに辟易しながら、ダブルカセットデッキと格闘する時間が続いた。

その甲斐あってというべきか、最終的にはほぼ満足のいく形にまとめることができた。冒頭とラストには、アニメのオープニングとエンディングの曲がそれぞれ流れ、所要所に効果音もしっかり入った。世界にひとつだけの、わたしたちのカセットブックが完成したのだった。

テープのラベルにタイトルを書こうとサインペンを手に取ったとき、タイトルが決まっていないうちに初めて気がついた。仕方がないので、とりあえずラベルの隅っこに「1989/8/15 灰田さん」と小さく書きこんだ。明日にでも灰田さんと会議をして、正式なタイトルが決まったら堂々とした大きな文字でラベルに書きこもうと思った。

次の日、完成品のテープを持って、意気揚々と灰田さんの家に向かった。朝から陽射しはきつかったけれど、連日のことなのでもう慣れていた。神社の横を通るときだけは、樹木が繁っているからか、いつもほんのちよつと涼しかった。

灰田さんの家の前に立ったのは十時頃だ。いろんなことが、いつもと違っていった。玄関の引き戸の向こうが、ガラス越しに明るく見えた。めずらしく電気がついていられるらしい。一階の窓が開いていて、テレビの音をかなり大きくしているのだろう、高校野球の実況や歓声が家の外までうるさいくらいに聞こえている。灰田さんのお母さん、今日は休みだろうか？ だとしても何か変な気がした。

いつもそうするように、玄関脇のブザーを押した。が、しばらく待ったものの、誰も出てくる気配がない。もう一度押した。鳴っているのかいないのか、テレビの音にかき消されてわからなかった。

と、家の中でドタドタと誰かが歩き回る音が伝わってきた。灰田さんも灰田さんのお母さんも、決してこんな乱暴な歩き方をしない。それから、ゴオーツという地鳴りのような音。でも、家から地鳴りがするわけもなく、すぐに気づいた。それは男の怒鳴り声だった。言葉は聞き取れなかった。けれど、ただその音だけで、わたしは恐怖を覚えた。

突然、扉の向こうに影が立った。その影は奥からやって来たのではなく、いきなりその場に現れたように見えた。

ガガ、ギー、と、立て付けの悪い扉がいやな音を上げながら横に引かれた。立っていたのは灰田さんだった。

まずおかしかったのは、パジャマ姿だったことだ。これまでもっと早い時間に来たこともあったけれど、灰田さんがパジャマのまま出てきたことなんて一度もなかった。白地にピンクのストライプの入ったパジャマは見るからに汗ばんでいる。

髪の毛も乱れ、くしゃくしゃだった。これも今までなかったことだ。さらに、目はつい今まで泣いていたかのように真っ赤に充血していた。

どうしたの？ 思わず出かかった言葉を、わたしは飲み込んだ。代わりに、「テープ、できたよ」と言った。

灰田さんは何も答えず、しばらくわたしの顔を見ていた。憔悴したような、ただ呆けたような、奇妙な表情だった。それから口をパクパクと動かした。何かを言おうとして、でもミュートされたみたいに音がなかった。

「あの、大丈夫？」

やっとわたしは言うべきことを言って、灰田さんの手に触れた。と、その行為を灰田さんは待っていたのだろうか。わたしの手を素早く握り返してきた。とても強い力だった。

「……ごめん、今、だめ」

かすかな声が、灰田さんの口からもれた。わたしの手を握って、やっと息を吹き返したとでもいうように。

「あとで、平野さん家、行くから」

一語一語を、やっとの思いで音にしている。そんなふうに見えて、わたしも言葉に詰まった。

「……うん、わかった」とにかくそう答えた。それから、思いきって、尋ねた。「何かあった？」

灰田さんの赤い目が宙をあっちこっちにさまよった。せわしなく何度も後ろを振り返った。また口が開いたり閉じたりを繰り返したあと、遅れたように声が出た。

「……お父さん、来たの」

どう返していいのかわからず、わたしは「そう」とだけ言った。父親が来た、ということとが灰田さんにとってどういう意味を持つのか、理解できなかった。

「……った」

ぼそっと、ひとりごとのように灰田さんはつぶやいた。ほとんど音になっていない声だった。にも関わらず、わたしには聞こえた。「見つかった」と、灰田さんは言ったのだ。

「それって、どういう……」わたしが訊こうとしたときだ。

「直子！」

家の奥から、テレビの大音量さえなぎ倒すような、爆発的な怒鳴り声が出た。わたしも灰田さんもすぐみ上がった。

「直子！」

再び怒声。灰田さんは慌てた様子で、

「ごめん、じゃあとで」

言い残すと、わたしの反応を待たずに扉を閉めた。ガラスの向こうでまた影になった灰田さんは、現れたときと同じように、瞬間的にかき消えた。

わたしはのろのろと自転車にまたがり、来た道に戻った。高校野球の音は、かなり離れたところまで聞こえていた。あの怒鳴り声は、親戚と名乗った男の声に間違いなかった。

家に帰って、灰田さんを待ち続けた。漫然とテレビを見ていたものの、いつ来るかわからない灰田さんのことが気になって全然楽しめなかった。お昼に冷たいそうめんを食べて、午後になった。灰田さんはまだ来ない。わたしはテレビに戻った。午後の番組はさらにつまらなかった。

インターホンが鳴ったのは三時に近くなる頃だった。灰田さん今日はもう来ないんじゃないかとそろそろ思い始めていたときだったから、宅急便か何かかもしれないとあまり期待せずに玄関へ出た。

ドアの外に立っていたのは灰田さんだった。いつものように、ごくあたり前に立っている。その顔に、午前中に会ったときの憔悴や怯えの色はなかった。

それでも、いつもと違う点がひとつだけあることにわたしは気づいた。玄関のドアを開けたとき、灰田さんがすでに笑顔だったことだ。

普段なら、灰田さんは出てきたわたしの顔を見て始めて笑みを浮かべるのだ。それまでは、玄関前で所在なげにもじもじと立っているのをわたしは知っていた。それが今日は、最初からニコニコと嬉しそうにしている。でもその表情はどこか硬く見えた。

「ごめん、遅くなった」

いつになくはつきりした声で灰田さんは言った。

「もう大丈夫なの？」とわたしが訊くと、「何が？」と逆に訊き返してくる。

「え、だって……」言いかけて、どう続ければいいのかわからなくなった。灰田さんがさっきの異常な様子をなかったことにしようとしているのなら、わたしから踏み込むことはできない。

「早くテープ聞きたい」と灰田さんは明るく言った。「楽しみ」

「……じゃあ、上がって」わたしも笑顔を返すしかなかった。普段通りに部屋へ灰田さんを通しながら、それでも一応は話のつじつま合わせに「元気そうでよかった」と声をかけると、「うん」とだけ灰田さんは言った。

部屋に入っても「暑かったでしょ?」「暑かった」なんて言い合って、ぎくしゃくした感じをすぐには拭えなかった。せっかくの試聴会だから豪華にやろうとわたしは言って、戸棚や冷蔵庫にあるだけのお菓子とジュースを、母親の小言を聞き流しつつ部屋に運んだ。「すごい!」と灰田さんは歓声を上げた。こんなふうに浮かれた様子の灰田さんを見るのは初めてだった。わたしもそれに合わせ、努めて実際以上のワクワク感を装った。

二人のあいだに漂う芝居臭を、おそらく灰田さんもわたしと同じように感じていただろう。けれど、いよいよ完成版のテープをラジカセにセットし、試聴が始まると、少しずつ雰囲気は変わっていった。

オープニングテーマが流れる。曲はサビを過ぎると徐々にフェードアウトしていき、いったん無音に。ややあつて「あーあ、退屈だなあ」と、〈青龍のミヅキ〉こと灰田さんの第一声。「こんなに平和が続いたら、体がなまっちゃうよなー」アニメのミヅキに決して似てはいないけれど、独特の可憐さのある少年声だ。続けて「何をのんきなことを……!」と、〈黄龍のハルマ〉たるわたしがしゃべり出す。普段聞いている自分の声とはだいぶ違うし、第三者的に聞けず判断はしにくいけれども、少年声としてはそんなに悪くないんじゃないかという気もした。

ふと見ると、灰田さんは壁にもたれて、目を閉じている。口もとにはうっすらとした笑み。でもその表情は、さっきまでの無理につくったような笑顔とは全然違って、自然に見える。わたしはやっと少しホッとして、灰田さんの顔を眺めた。ドラマが進むにつれ、灰田さんの体からは不必要な力が抜けて、リラックスしていくようだった。面白い場面になると、灰田さんとはときどき「ふふっ」と声をもらした。わたしは編集のときに何度も聞いているので笑いはしなかったけれど、灰田さんにつられて楽しい気持ちになった。

ドラマが終わり、エンディングテーマが流れ始めると、閉じたままだった目を灰田さんはようやく開いた。灰田さんの顔を見ていたわたしと視線が交わる。どちらも目をそらしたりしなかった。わたしたちは微笑みあった。

「ねえ、もう一度、最初から」と灰田さんが言う。「うん、いいよ」とわたしは答えて、テープを巻き戻した。

灰田さんは「もっと近くで聞きたい」と言ってフローリングの床に腹ばいになった。わたしはCDラジカセを床に置いていたので、その姿勢だと灰田さんの目の前にスピーカーが位置することになる。

「平野さんも、来て」

腹ばいのまま振り返って灰田さんは言った。心なしか頬が熱っぽく上気している。灰田さんがこんなふうに、積極的に何かを要求するような物言いをするのは珍しかった。

わたしも灰田さんと同じように床の上に寝そべり、肘で体を支えた。スピーカーが目の前に来て、すぐ横には灰田さんの顔があった。床は思ったより冷たくなかった。扇風機は全開で回っていた。灰田さんの鼻の下に汗が玉になって浮かんでいた。わたしは手を伸ばしてラジカセの再生ボタンを押した。

わたしたちはラジカセの前に顔を寄せ合い、テープを聞いた。始めから終わりまで、何周も繰り返して聞いた。ただし灰田さんもわたしも、黙って静かに聞いていたのは最初の一回だけだ。二回目からは、ドラマの内容や二人の演技について、ぺちゃくちゃとしゃべり通した。エンディングテーマが流れるたび、灰田さんは決まったセリフみたいに「もう一度、最初から」と言った。三周目のあとでわたしが「まだ聞くのー？」とわざと苦笑いをつくって言うと、「いいでしょ、お願い」と甘えたような声を出した。「はいはい」とわたしは応じてまた巻き戻し、再生した。

何回繰り返しても、嫌にはならなかった。というのも、わたしの演じるハルマについて、灰田さんがしきりに「かっこいい」「素敵」「平野さんゼツタイ声優になれるよ」など、ありとあらゆる賛辞を与えてくれたからだ。さすがにわたしは照れて「もういいよ」「なれるわけじゃないじゃん」と返していたけれど、内心すごく気持ちよくて、けっこうその気になっていた。こんなに言われるのなら、本当に自分には声優としての素質があるのかもしれない、なんて、平凡な中学生らしい考えを抱き始めてもいた。

だからといって、わたしだけいい気持ちになってはいけないというバランス感覚のようなものもまだ残っていたらしい。わたしはわたしで、灰田さんのミヅキ声を「かわい」「よい」などと言ってほめた。灰田さんのようにたくさんの言葉を使わず、ポイントをしぼって、本当にいいと思ったときだけほめた。わたしがほめると、灰田さんの言葉は途切れて、顔は面白いように赤くなった。

そうやって五回も六回も繰り返しテープを流した。ドラマはオープニングとエンディングを含めても十分ちよっとの短いものだったから、気軽に最初から聞き直すことができた。途中からは二人ともほとんど内容を聞いてなくて、ドラマをBGMみたいにしてキャッキヤと騒いでいただけだった。

ただわたしの中には、わずかながら不安もあった。それは、灰田さんのこの浮かれっぷり、はしゃぎようは、なんだか変じゃないかという、警戒心に似たものだった。じつところ灰田さんは今、かなり危険な精神状態にあるのではないか。だとしたら、わたしが気

をつけて見守ってあげないといけない――。

でもそのかすかな認識が、表面に浮上することはなかった。それどころか、灰田さんがあんまり「かつこいい」というものだから、わたしはだんだん調子に乗ってきたのだった。

わたしはドラマ内と同じような少年声をつくって、「キミの声だってかわいいよ」と灰田さんに言った。笑ってもらおうつもりだった。でも灰田さんは笑わなかった。

「……声だけ？」

すねたように、口をとがらせて言う。

これもノリだとわたしは解釈した。わたしは灰田さんの耳もとに口を寄せ、さらに低い声になるよう意識しながら、ゆっくりとささやいた。

「かわいいよ、直子」

途端、灰田さんの目が変わった。「目の色が変わる」という言い方があるけれど、その瞬間の灰田さんはまさにそんなふうだった。黒目だけが急に大きくなった。瞳はみるみるうちに涙で潤んでいった。

「言って」と灰田さんは言った。「もっと言って」

それでもわたしは、どこかでまだ冗談だと、ノリだと思っていた。いや、そう思うようになっていたのかもしれない。それで、「かわいいよ直子。好きだよ」と、ダメ押しのようなひとことを言ってしまった。

わたしの手に灰田さんの手が触れた。と思ったならもう手を握られていた。強い力だった。灰田さんの顔が、目の前にあった。わたしは彼女の目を五センチの距離からまともにのぞきこんだ。「何？」とわたしは訊いた。声が震えた。次の瞬間、わたしの唇にしっとりとしたものが押しつけられていて、もちろん灰田さんの唇だった。わたしはずっと目を見開いていた。視界いっぱい灰田さんの顔があって、ほとんど何も見えなかった。意味がわからなかった。

思考よりも速く体が反応した。わたしは両腕で灰田さんを突き飛ばした。ふさがれていたわたしの唇は解放されるやいなや「やめてよ！」と叫んでいた。

寝そべっていた姿勢から半身を起こして、灰田さんを見た。灰田さんは床の上に仰向けに倒れていた。右腕を両目の上に、かぎすように置いていた。口は薄く開いていて、そこだけ見るとポカンと驚いているみたいだけれど、目が隠れているので全体の表情はわからない。そのままじっと、身動きしなかった。長いことそうしていたように感じた。でも実際にはおそらく数秒のことだったろう。怪我でもしたのかと心配になってきた頃、灰田さんはおもむろに起き上がった。

――笑顔だった。「やだ、もう」と言った。「本気にしないでよ」と、目は笑ったまま、

プツと頬を膨らませた。ものすごく説明的な表情に見えた。必死で取り繕おうとしているのが伝わってきて、痛々しかった。わたしは合わせないといけないと思った。

「ごめん、びっくりしちゃって」

そんなことを言っていて、がんばって笑みを浮かべた。でもちゃんと自分が笑顔をつくれていいのか、自信はなかった。

「ウソウソ。ギャグ」と灰田さんは言った。何がウソでどうギャグなのか難しいけれど、わたしは「ですよねー」と返した。

「平野さん突き飛ばすんだもん、ひどい」

「ごめんよー許しておくれー」

じゃれあいのようなやりとりをしながら、わたしは早くこの話題を終わりにしたくてたまらなかった。きつと灰田さんはもつと強くそう思っていたことだろう。

テープの試聴会はお開きになり、わたしはすぐにテレビをつけた。不自然な雰囲気になえきれなかったからだ。テレビのにぎやかな音声が部屋の雰囲気を変えてくれるかもと期待した。チャンネルを適当に変えていくと昔のアニメの再放送をやっていて、二人ともあまり興味のない作品だったけれど、「あ、こんなのやってるんだ、なつかしい」とか言っていて、見た。ちょっとした設定なんかにつつまみを入れて笑いあったりして、楽しく見ている感じを出した。

アニメが終わるタイミングで、「じゃあ、今日は帰るね」と言っていて灰田さんが立ち上がった。時計を見ると六時半だった。わたしはいつものように玄関まで灰田さんを送っていった。

「じゃあね、気をつけて」

「うん、またね」

「バイバイ」

「バイ」

薄暮の町の中へ小さくなっていく灰田さんの後ろ姿にわたしは手を振った。一人になることができ、ホツとしていた。結局、ドラマのタイトルは決められなかった。

七

わたしは週に四日、スーパールの仕事に通った。シフトはまちまちで、午前中だけのときもあれば、短い昼休憩をはさんで午後まで入ることもあった。募集の紙にはレジ係としか書いていなかったけれど、実際には品出しやそのほか雑多な業務もあり、それまであまり

体を動かしていなかったせい、品出し作業は意外なほど重労働に感じた。とはいえ、さすがにその程度のこととは想定内だったので、とくに不満は持たなかった。

レジスターは、昔わたしがコンビニやなんかでアルバイトしていた頃に使っていた機械とはずいぶん違っていた。進化したというのだろうか。キャッシュレス決済のことなど全然わからないわたしは、使い方をまったくの1から教えてもらわないといけない。最初の日、一緒にレジに入って教えてくれたのは売場責任者の倉本美樹だった。

再会した倉本さんに、どんな態度で接するべきなのか？　これは当初、とても難しい問題に思えた。倉本さんには「主任」という肩書きがある。昔の同級生といっても、今は仕事の関係なのだから、「倉本さん」と呼ぶわけにはいかないだろうと思った。

「倉本主任、本日はよろしくお願ひします」

初日、その声をかけたわたしに、倉本さんは驚いたように目を丸くした。

「え、なに？　水くさいじゃない」と言っつて、笑う。

「あ、はい」

「いいよ、そんなガチガチにならなくて。わたしとメグの仲でしょ？」

言われて、わたしは曖昧に笑みを浮かべた。「わたしとメグの仲」という言葉に、微妙な居心地の悪さを感じた。中二の頃、たしかに毎日お昼休みを倉本さんと一緒に過ごしていたけれど、わたし自身はあくまでグループの中の一員に過ぎない感じで、倉本さん個人とそんなに親しくしていた印象はなかったからだ。

最初のうちは緊張していることもあって、倉本さんに対する態度のぎこちなさはなかなか抜けなかった。一週間が経ち、仕事にやや慣れてくると、倉本さんの職場内でのポジションが少しずつ見えるようになった。

たしかにほかのみんなも、倉本さんのことを「倉本主任」と呼び、敬語で話している。でもそれは決して堅苦しいものではなく、親しみのあるくだけた丁寧語だった。若い子も年配のパートさんも、倉本さんを一応上司として立てながら、実質は普通の話し好きな気のおおばさんとして接している様子なのだ。つまり、わたしもみんなに倣えばいいのだろう。そう思っつてからは、徐々に硬さもやわらぎ、わりと普通に倉本さんと話ができるようになった。

一方、毎晩寝る前に布団の中で灰田さんのテープを聞く習慣は続いていた。声優の真似ごとをして喜んでいる中学生の灰田さんとわたし自身の声を聞いていると、不思議なほどスムーズに眠りへ入っていくことができた。慣れない仕事と人間関係に絶えず緊張し続けているわたしにとって、テープを聞くという反復行為は心を休ませるために必要な、儀式のようなものだったのかもしれない。

テープを繰り返し聞いてみると、そこで話されている言葉は次第に意味を失っていく。そして声だけが、ただその音だけが、横たわって目を閉じているわたしの内部に広がり、響き、やがて潮が引くようにわたしを眠りの虚無の中へ連れ去ってしまうのだ。

わたしが眠りへ落ちていくとき、二人の少女の声はもう名前のある誰かの声ではない。それは波、わたしを暗闇へさらう波だ。闇の中にわたしはなく、灰田さんもなく、世界もない。ただひとつの広がりだけがひろがり、安らぎをやすらっているだけ――。

九月に入ったある日、たまたま休憩時間が重なり、倉本さんと一緒にお弁当を食べた。パートに入ってから初めてのことだった。

中二のとき以来だね、何十年ぶりだろう、とつても感慨深いよね、という意味の話を倉本さんはしゃべった。わたしは、そうですね、うん、はい、だよ、と丁寧語とタメ口のちゃんぽん言葉で相づちを打ち続けた。周りにはほかの従業員も数人いたけれど、倉本さんはわたしだけに向かって、中学時代の思い出話を絶え間なく語った。

倉本さんの口からは、先生やクラスメートの名前が次々に出た。わたしがほとんど、いや全然憶えていない名前もいくつもあった。倉本さんは一人一人の容姿や特徴、ちょっとしたエピソードなんかを事こまかに憶えていて、その記憶力のよさには驚くしかなかった。今でも何人かとは連絡を取り合っているらしく、彼女らの近況まで教えてくれた。

一人また一人とクラスメートの名前が挙がるたび、次は灰田さんの名前が出るのではないかとわたしは思った。期待半分、不安半分の気持ちだった。でも灰田さんの名前はいつまでも出なかった。

倉本さんが壁の時計に目をやった。昼休みも終わりに近づいていた。ここでやっと話が途切れた。倉本さんとしてはずっとしゃべり通しだったので小休止を入れただけなのかもしれない。けれど今までにぎやかだったのが急に静かになると、わたしにはなんだか気づまりで、今度はこちらから何か話題を提供しないとイケないんじゃないかと思った。

「……灰田さんって、憶えています？」とわたしは訊いた。灰田さんのことをずっと考えていたから、話題といってもほかに思いつかなかったのだ。

「あー、いたねー」と倉本さんは言った。さっきより声のトーンが少し下がった気がした。「なんか暗い子だったね。ちょっと気味悪いっていうか。何考えてるかわかんない感じで」
「……うん、そうだったね」

わたしは同意を示した。そうするよりなかった。また沈黙が降りた。わたしから灰田さんの名前を出した以上、ここでもう少し何か言わないといけないと思った。でも何も言えなかった。言葉が見つからなかった。

「灰田かー」と、倉本さんが再び口を開いた。「最後はかわいそうだったね。結局、あんなことになっちゃって。ニュースで見るときはちよつとびっくりしたよね」

ニュース……？ 何の話だろう？ すぐに相づちを返したかった。話の通じない、鈍い人間だと思われたくない。でもわからなかった。仕方なくわたしは訊いた。

「……え、灰田さん、ニュースに出たの？」

倉本さんはちよつと驚いたように小さな目を開いて、わたしの顔を見つめた。

「メグ、知らないの？」

訊き返されて、困惑した。「何を？」と返す。嫌な予感がした。

「――灰田、死んだんだよ？」と倉本さんは言った。「絞め殺されたんだよ。東京で。ダンナに」

わたしは思わず息を呑んだ。

「あ……え、と……」

言葉にもならない音が口からもれた。

――灰田さんが、殺されていた？

混乱する頭をなんとか整理しようと努力して、ようやく意味のあることを訊いた。

「あの……それって、いつのこと？」

「ええと、あれは……」倉本さんは首を傾げて、斜め上方に目をやりながらしゃべった。

中学時代のことはすぐ出てくるのに、この件については思い出すのに苦労する様子だった。

「……十年、ううん、もつと前だっけかな？」と言ってから、「あっ！」と声を上げた。

「そうだ、思い出した。ちょうどオリンピックのあった時期だよ。北京オリンピックだよ」

そう言って、嬉しそうに笑った。「だからかな？ あんまり話題にならなかったみたい。新聞にも小さく載ってたけどね」

それから、自分が笑っていることの不謹慎さに突然気がついたみたいに、慌てて暗い表情をつくって、わたしの目を見た。

「そっか、メグは知らなかったんだ……」

午後、仕事が終わりにロッカールームへ戻ると、着替えるのももどかしくユニフォームのままスマホで検索した。

二〇〇八年、夏、東京、殺人事件――。

この年は六月に秋葉原の通り魔事件があり、検索結果の上位はほとんどこのことで占められていた。下方へスクロールしていくにつれ、マイナーな事件や情報がぼつぼつと出てくる。

倉本さんは北京オリンピックの時期だったと言っていた。ウィキペディアによるとオリンピックが開催されていたのは八月八日から二十四日までの十七日間で、その期間に東京都内で女性が絞殺された事件は、わたしの見つけた限り、一件だけだった。

八月十四日、町田市内のアパートで、三十三歳の女性が夫によって殺害されている。犯人の名前は火田俊夫、年齢は三十七歳、無職。

夜の十一時頃、酔って帰宅した火田は妻と口論になり、スチームアイロンで妻の頭を何度も殴ったあげく、コードで首を絞めて殺害した。翌朝になって火田はみずから警察署へ出頭し、逮捕されている。

——これが、本当に灰田さんの殺された事件なのだろうか？ 記事を読んでも、わたしは確信が持てなかった。灰田、という名前が一度も出てこないからだ。

妻の直子さん、とその記事には一貫して書かれていた。姓はもちろん火田、なのだろう。年齢はわたしと同じだけれど、記事には被害者の写真はなく、この女性がわたしの知っている灰田さんなのか、確かめようがない。いくつか見つけたほかの記事にも、写真はなかった。

倉本さんには、この女性が灰田さんだとどうしてわかったのだろう。テレビのニュースには写真が出ていたのだろうか。それとも、東京にいる知り合いとか、報道とは別のルートからの情報で灰田さんだとわかったのか。

あるいは倉本さんは、火田と灰田を単純に見間違えたのかもしれない。なにしろ火と灰、字はとてもよく似ている。その可能性は大いにあるだろう。とそこまで考えてわたしは、倉本さんが「ニュースで見たとときびっくりした」と言っていたのを思い出す。テレビなら被害者の名前もアナウンサーが読み上げたはずだ。ヒダとハイダ、音で聞けば似ていない。一方で、加害者の写真は大きく出ていた。火田俊夫は、細面に銀縁のメガネをかけた、神経質そうな雰囲気の人だった。わたしの夫にも、どことなく似ている気がして、気が重くなる。直子さんの体には複数のあざがあり、加害者が日常的に暴力をふるっていた可能性もある、と記事は最後に締めくくっていた。

スマホの画面を閉じると、なぜか体から力が抜けてしまったようになって、グズグズと服を着替えた。あとからロッカールームに入ってきた同僚の女性がわたしを見て、「あれ、まだいたの？」と怪訝な顔をした。

八

キスのことがあってから、夏休みが終わるまで灰田さんには一度も会わなかった。とい

うのは、あのあとすぐわたしは父親の田舎である京都の舞鶴へ家族とともに帰省し、一週間後の八月下旬に戻ってきてからは、手つかずでいた夏休みの宿題に追われてほとんど外出することもなかったからだ。

それでも、灰田さんの家にほんのちょっと顔を出しに行くくらいの時間がないわけではなかった。何度か、今日は行ってみようかと考えたこともある。でも行けば行ったで、気まずい思いをすることはたやすく想像できた。それに灰田さんの父親らしき男の、あの異常な怒鳴り声……。考えるほどに億劫な気持ちになり、結局最後まで足が向かなかった。

灰田さんの方からもうちに来なかったし、電話もなかった。わたしと同じような気持ちだったのだろうか。今となってはわからない。

九月一日、始業式の日、久しぶりに灰田さんの姿を見た。灰田さんは時間ぎりぎりに教室に入ってきた。そのとき一瞬わたしと目が合い、でもすぐに灰田さんは目をそらした。わたしの顔を見ないようにうつむいたまま、自分の席、わたしの前に、背中を見せて座った。灰田さんは最後に会ったときより少しやせて、疲れているように見えた。

クラスの中に、わたしと灰田さんが仲良くなったことを知っている子はいなかった。だから、みんなの前で灰田さんに話しかけるわけにはいかない。でも放課後になれば――とわたしは思った。灰田さんに声をかける機会もきつとあるだろう。

ところが放課後になると、灰田さんは誰よりも先に教室から出て行ってしまい、話すチャンスはなかった。今日はだめだったな、とわたしは思った。でもそのうちに、きつと。

そのうちに、そのうちに。そんなふうに考えるうち、あつという間に学期始めの短縮授業の期間が過ぎてしまった。さらに九月の半ばを越えても、まだわたしは灰田さんと話せないでいた。そのうちに、はいつまでも終わらなかった。

けんかをしたわけでもないのに、なぜ挨拶のひとつもできないのだろう。わたしにはどうしても理解できなかった。灰田さんの背中毎日こんなにも近くにあつて、手を伸ばせば触れることもできるのに、日一日と彼女は遠ざかっていく思いがした。

十月を前にして、とうとう席替えがあった。灰田さんは廊下側最前列へ、わたしは窓際の席になり、わたしたちは心の距離に比例するかのようになり、物理的にも離れてしまった。そのことを、自分があまり残念に思っていないと気づいたのは、新しい席に移って数日を過ごした頃だった。残念に思っていないどころか、灰田さんと席が離れて、むしろホツとしていたのだ。毎日灰田さんの真後ろにいながら、声をかけることができないもどかしさは、自分で思っていた以上にわたしを苦しめていたようだった。

一学期の状況がすっかりそのまま戻ってきていた。わたしは倉本さんのグループの中で、毎日の昼休みを過ごした。灰田さんは生徒の頻繁に出入りする入口近くの席で黙々と昼食

を摂り、食べ終わるとすぐに教室を出ていった。トイレに行くと、長々と時間をかけて手を洗っている灰田さんと鉢合わせすることもあった。そんなときわたしは脇目もふらず一直線に歩いて個室に入り、灰田さんがいなくなったのを耳でしっかり確認してから出ていくのだった。

二学期が始まったなら、灰田さんを昼休みのグループに誘おう。夏休みの間、わたしはそんなことを考えていた。それがどんなに非現実的な空想に過ぎなかったか、ひりつくような痛みとともにわたしは思い知らされた。

十月に入ると、灰田さんはぼつぼつと学校を休むようになった。最初のうち、灰田さんの欠席理由について先生は、風邪とか腹痛とか、何がしかの病名を挙げていた。でも休みの頻度が次第に高くなるにつれ、たんに「体調不良」と言うようになり、やがて何も説明しなくなった。

灰田さんは学校に来て、すぐに早退することが多くなった。もちろん授業にはついていけなくなり、十月中旬にあった中間テストでは全科目で赤点を取っていた。本来なら放課後に補講を受けないといけないのだけれど、この頃にはもう灰田さんが六時間目まで学校に残っていることはほぼなかった。

秋の深まりとともに灰田さんは登校する日より欠席する日の方が多くなっていった。やがて十一月も半ばを過ぎ、校門前の銀杏並木がすっかり色づく頃になると、灰田さんはほとんど学校に来なくなっていた。

灰田さんが登校しなくなったことについて、先生はとくに何も言わなかったし、クラスの誰からも、ひとつの質問さえ出なかった。疑問に思うようなことでは全然なかったからだ。今までの流れから、当然そうなる事態が起きただけ、という感じで、つまり誰も灰田さんのことを心配せず、そもそも気にしてもいなかった。

わたしはといえば、常に靴の中に小さな石でも入っているような落ち着かない不快さを抱えながら、毎日同じ道を歩いて学校へ通い、毎日同じメンバーとお昼ごはんを食べた。

——決定的な出来事があったのは、くもり空の続く十二月はじめの、ある日だった。朝、登校して教室に入ると、灰田さんがいた。灰田さんがこの前に学校へ来たのはいつだったのか、とにかく久しぶりのことだった。

灰田さんの姿を目にした途端、わたしは思わずぎょっとして、足が止まりかけた。

というのも、夏休みが明けてからというもの、灰田さんは見るたびにやせて小さくなっていくようにわたしには見えていたのだけれど、久しぶりに見たこの日の灰田さんは、もはや「やせて見える」というレベルではなく、ちょっと異常なほどガリガリになっていたからだ。それだけではない。顔は全体に薄汚れたみたいに黒ずんで、髪の毛は寝起きでそ

のまま来たみたいにもサボサだった。

わたしは一瞬で灰田さんから目をそらし、自分の席へ向かおうとした。でも灰田さんの席は教室に入ってすぐなので、否応なしに彼女の目の前を通ることになる。そのとき、ぷん、と臭いがした。生乾きの洗濯物の嫌な臭い、それもかなり強烈な悪臭だった。

自分の席に着いてから、あらためて灰田さんに目をやった。そこからだと、灰田さんを斜め後ろから見ると格好になる。灰田さんの着ている制服は、遠目でもわかるくらいにしわくちゃだった。やせ細った体にしわくちゃの服を着て、身動きひとつせず、ただじっと正面の黒板を見つめていた。古い木でできた見すばらしい人形みたいだった。そんな姿の灰田さんを見ると、わたしは不安でたまらなくなった。まるで高いところに手すりもなしに立っている人を下から見上げているような、背筋が寒くなるような不安だった。

不安は的中した。もちろんいつだって、不安は的中するのだ。

「灰田くっせえ！」

大声を上げたのは、灰田さんの近くの席の男子生徒だった。その男子はクラスの人気者で、日頃からお笑い芸人の一発ギャグを自分が考えたみたいに恥ずかしげもなく全力でやってみせたりしていた。このときも灰田さんをネタにして笑いをとろうとしたのだろう。残念ながら男子のもくろみ通りになった。ちょうどみんなが灰田さんの様子や臭いについてコソコソと話をしている最中で、声を上げるタイミングが絶妙だったのだ。次の瞬間、クラスに爆笑が起きた。

急に肩を叩かれた。振り向くと倉本さんが文字通り腹を抱えて笑っていた。わたしにはおかしくもなんともなかった。だけど最悪だったのは、わたし自身、倉本さんの爆笑を前にして、笑みを浮かべてしまったことだ。いやそれだけじゃない。アハハ、と声まで出した。ここで一緒に笑わなければ仲間外れにされてしまう、だから仕方なく笑ったのだ、なんていうのはあとから考えて思いついた言い訳で、このときはただ反射的に笑っただけだった。

灰田さんがどんな顔をしていたのかわからない。さっきよりやうつむき加減になっていて、私の位置から表情は見えなかった。ただ固まったようにそこにじっと座っていた。まもなく担任が入ってきて、笑顔のみんなを見るなり「なんだ、朝から楽しそうだな」と機嫌よく言った。朝のホームルームに続いて一時間目の数学の授業があり、そのあとの十分間の休憩の間に灰田さんはいなくなっていた。そのまま何事もなく、二時間目の現国の授業が始まった。灰田さんは二度と学校へ来なかった。

十月七日、月曜日。わたしは四十四回目の誕生日を迎えた。といって、何が違うわけでもない。朝、いつものように食パンを半分食べてスーパーへ行った。

店はお昼を前にして急激に混み始め、各レジには長い列ができた。これもいつものことだ。最初のうち、レジに行列ができるかとひどくあせったものだけれど、パートを始めてから二ヶ月が経ち、今ではあまり緊張することなくレジ業務をさばけるようになっていた。

でも、その慣れがいつのまにか慢心を招いていたのだろうか。あるいは、今日の仕事は午前中だけで、明日は休みだというので浮かれていたのかもしれない。わたしは今までになく次々と失敗をしでかした。

まず、バーコードのついていない揚げ物の値段を打ち間違えた。自分では気づかず、精算したあとになって客から指摘され、返金処理をした。続いて、スマホ決済の客のときになぜか違うボタンを押してしまいエラーが出て、この場合のレジの復旧の仕方がわからず、周りのレジのパートさんに尋ねようと思ったのだけれどみんな忙しそうで気後れし、一番近くにいた男性社員に走って訊きに行くことにした。途中、什器じゅうきの角を曲がったところで年配の女性客にぶつかり、慌てて相手の体を支えたのだがもう少して転倒させるところだった。何度も頭を下げて謝罪し、それからやっと、押尾さんという男性社員をレジまで連れてきて復旧してもらった。その間も長く伸び続ける行列の客たちは完全に放ったらかし状態、みんなあからさまにイライラとした顔つきをしていた。さらにある客の精算が終わる次の客のレジ打ちを始めようとしたときになって前の客が戻ってきて、さっきは家に忘れたと言っていたポイントカードを「やっぱり持ってたわ」とあたり前みたいに突き出し、勢いに押されたわたしがポイントカードを受け取ったところ次の客が「横入りさせるな」と激怒、大声で怒鳴り散らし始めた。必死に謝り、ポイントカードを前の客に返そうとしたら今度はそっちの客も怒り出して收拾がつかなくなり、レジを復旧してくれた押尾さんがまた戻ってきて一緒に謝る羽目になった。

そのあとわたしはフラフラになりながらなんとか仕事をこなした。勤務時間が終了するや「お疲れ様でした」と残った力を振り絞るようにして周りに言った。さっさとロッカールームへ引き上げるつもりだった。ところがそうはいかなかった。押尾さんが寄ってきて、「倉本主任が呼んでるよ」と告げたのだ。

倉本さんは事務所にいた。わたしは普段と同じく口角を上げて、できるだけ自然な笑顔になるよう努めながら部屋に入っていた。倉本さんは笑っていなかった。口をへの字にした下唇だけを突き出してみたり、なんだか変な顔をしていた。デスクの前の回転椅子に座って、左右にキコキコと体を揺らしている。

「えっと、話があるって聞いたんだけど……」

相手が何も言わずいつまでも変な顔が続けているので、わたしから声をかけた。

「ん、そだねー」と倉本さんは妙に高い声を出し、「ごめんね、帰る時間に呼びつけて」と言った。

今日のことを何か言われるのだろうかと思った。その予想は間違っていなかった。

「なんかー、押尾くんから聞いたんだけどさー」と倉本さんは話を始めた。「今日のメグ、ちょっとひどかったみたいだねー」

ひどかった、という言葉にショックを受けた。倉本さんからこういうことを言われるのは初めてだった。

「……うん。そうみたい。ちょっとテンパっちゃって。ごめんなさい」

今日は謝ってばかりだな、と思った。でも仕方がない。倉本さんの機嫌を損ねたくなかった。

「うーん」と倉本さんは一声うなつてまた口を曲げ、「なんかさー」と続ける。「今それって、違うんじゃない？」

言ってることの意味がつかめない。「え、違う……？」とわたしはバカみたいに繰り返した。

「わっかんないかなー」と言う倉本さんの口調が変化し始めている。いらついているらしい。

「つまり、ごめんなさいって謝り方は、違うんじゃない？ ってこと」

まさかと思った。謝り方の問題だったのだ。となると違う言い方で謝ればいいのか？

わたしの頭には「申し訳ございませんでした」という文句がすぐに浮かんだ。でも実際に口にしたのは「すいませんでした」だった。パートを始めた頃に言われた「わたしとメグの仲でしょ」という倉本さんの言葉が、わたしの言動を縛っていたのだろう。

言い直したわたしの謝罪について、倉本さんは良いとも悪いとも言わなかった。

「最近、パートさんたちが言ってるらしいんだけど」と、違う話を始めた。

「メグの態度が、わたしに対して馴れ馴れしすぎるんだってさ」

予想もしない話だった。

「え……」

わたしは困惑した。

倉本さんは誰からそんなことを聞くのだろうかと思った。押尾さんだろうか。わたしだって、馴れ馴れしくしたいわけじゃなかったのに。倉本さんがそうするように促したんじゃ

ないか。

「だいたい、本当にほかのパートの仲間がそんなふうわたしを悪く言っているのだろうか。すぐには信じられなかった。」

「最近入ったパートなのに、同級生だからって何か勘違いしてるんじゃないかって、けっこう怒ってる人がいるみたい」

「……」

「わたしが言ってるんじゃないよ？　でもそんなふう思う人もいるってこと、メグは知つとした方がいいかなって」

「……はい」

「まーねー、そういう人の言い分にもたしかに一理あるかなって、わたしとしても思っちゃったりするんだな。さっきのメグの謝り方とかさー、見てるとねー」

「あの、でも……」

わたしとしては、それは自分のせいではないということをはっきりさせたかった。ところがちょっと言葉をはさんだ途端、「でも、何？」と倉本さんがずっと立ったままにいるわたしを下からにらむように見上げたので、それ以上何も言えなかった。

「言いたいことがあるなら、言いなよ」と倉本さんは言った。

「……ありません」とわたしが答えると、倉本さんの表情が少し和らいだように見えた。

「わたしがメグを勘違いさせちゃったところもあるのかなーって、思うけどね。うん。だとしたらごめんね。わたしもこれからは、しっかり一線を引くように気をつけるから」

一気に鼻の奥が痛くなってきて、目に涙があふれるのを感じた。泣きたくなかった。

「申し訳ございませんでした」とわたしはやっとの思いで言った。声が泣き声になっていて恥ずかしかった。謝る必要のない相手に、またわたしは謝っている。

「うん」

わたしの泣き顔を見て、倉本さんは満足げに微笑んだ。

「応援するからね、メグ。これからも、一緒にがんばろうね」

悲しさと口惜しさと怖さとわけのわからなさ、それらがなймаぜになった泥のような感情を抱いてわたしはスーパーを出た。時刻は午後一時を回ったところだった。自転車に乗って、ゆらゆらと揺れながら、歩くような速度で帰り道をたどった。家に着いたら部屋にこもって灰田さんのテープを聞こうと、そればかり考えていた。

帰宅するのにないぶん時間がかかった。母に顔を見られたくなくて、そっと玄関のドアを開けたのだけれど、間の悪いことにちょうど居間の方から母が廊下へ出てくるところだ

った。

「何？ 帰ってきたんならただいまくらい言いなさいよ」

いきなり母から不機嫌な声が飛んでくる。わたしには返事をする気力もなかった。黙ったまま、母の横をすり抜ける。

「お昼は食べたの？ コロッケあるよ？ ちょっとメグ！ 返事くらいしなさい！」

二階への階段を上がるわたしの背中に、腹を立てた母の声が投げつけられた。わたしは疲れすぎていて、母に対して悪いと感じることもないまま、振り返りもせず自分の部屋に入ってドアを閉めた。

ようやく自分のテリトリーにたどり着いたわたしは、まずベッドに突っ伏した。枕に顔をうずめて、十五分くらいじっと動かなかった。ぞんぶんに泣こうと思っていたのに、いざとなると全然泣けなかった。

ゆっくりと起き上がって、またラジカセの前に行った。テープはずっと入れたままになっている。再生ボタンを押した。聞き慣れた音声流れ出す。その中にはほんのわずかな意外性もない。すべては予定調和で満たされている。誰を傷つけることもないし、誰からも傷つけられない。――そう思っていたのだけれど。

テープの途中で、予想外のことが起きた。わたしがセリフをしゃべっているときだった。突然、音が歪んだ。わたしの少年声が、野太い男の声に変わり、異常なスローテンポでしゃべりだしたかと思うと、言葉は全然聞きとれなくなり、さらにカシヤカシヤという機械的な音がテープデッキからもれてきた。

わたしは慌ててテープを止めた。デッキの状態を確認しようとイジェクトボタンを押すと、ひどいありさまが目に入った。カセットから磁気テープが大量にとび出し、ぐちゃぐちゃにからまっていたのだ。

慎重な手つきでカセットをデッキから抜いた。見れば見るほど、絶望的な状態だった。テープはからまっただけでなく、あらゆる箇所でよれたり折れたりしていて、少なくともわたしの能力でもとに戻せるとは到底思えない。

テープを聞くことはわたしにとって、渴いた喉に冷たい水を流し込むような行為だった。ともすれば暗く憂鬱な場所へドロドロと流れていきそうになるわたしの心をつなぎ留め、鎮めてくれる、ただひとつの抛り所だった。そのテープを、もう二度と聞くことができな

い。
どうすることもできず、何を考えればいいのかもわからなかった。わたしは、はらわたのとび出た死体と化したカセットテープを手にしたまま、呆然と時を過ごした。

――どれくらいそうしていたのだろう。不意にものすごく嫌な感じがして、顔を上げた。

体の奥から、棘の立った不安がだしぬけにせり上がってきたみたいだった。何これ、と思
い、ハツと気がつく。不安の源は、外から聞こえてくる車のエンジン音だった。その音に
は聞き覚えがある。忘れるわけもない。夫の車の音だ。

家の前でエンジンが止まり、急に静かになった。わたしは音に意識を集中する。テープ
を手に持った状態で、体は金縛りにあつたみたいに固まっていた。やがて車のドアが開き、
閉まる音。それからややあつて、ピンポン、と、インターホンの暴力的な大音量が家の中
に響き渡った。

出なくていい、無視していい、とわたしは強く願った。けどもちろんそうはいかない。

「はい」というよそ行きの声とともに、母が玄関へ出ていく物音が聞こえた。

玄関のドアが開いて、「あらっ」と母の声があった。続いて夫の低い声。「こんにちは、ご
無沙汰してます」と言ったみたいだったけれど、後半はよく聞こえなかった。というのも、
夫の言葉が終わる前に、両手で自分の耳をふさいだからだ。

とにかく夫の発する言葉なんか、一語たりとも聞きたくなかった。こうして耳をふさい
でいれば、夫が何を言っているかはわからない。ところが声だけは、耳をふさいでいても
聞こえてしまうのだった。どうしてこの男はこんなに大きな声で話すのだろう、そんな必
要がどこにあるのかと怒りを覚えた。

玄関先で、母と夫は何事かを話し合っている。中に入れるな、追い払え、追い払え、お
母さん、お願い——またわたしは願った。もう願いたいより、必死の祈りだった。

祈りは通じなかった。玄関が大きく開き、「お邪魔しまーす」という言葉が、耳をふさい
でいるにも関わらずはつきりと聞こえた。

わたしは耳から手を離して立ち上がった。じっとしているわけにはいかなかった。どう
にかしてここから逃げないと、と思った。

ドスドスという遠慮のない足音が響いた。夫は居間に入っていったようだ。階段の下か
ら母が「メグー！ めぐみー！」とわたしを呼ぶ。いくら呼ばれたって、返事なんかでき
ない。

居間はこの部屋の真下だった。足音さえ立てられない。でもわたしがいつまでも返事を
せず足音も立てなければ、ひよっとして夫はわたしがいないと思つて、帰ってくれるので
はないだろうか。なんて、そんな都合のいい事態はわたしの世界に決して起きない。夫は
とうとうこの家までやって来たのだ。あのプライドの高い男が、わざわざ自分からわたし
に会いに来た。つまりしびれを切らした。堪忍袋の緒が切れた。わたしに会うまで帰るわ
けがない。

「めぐみー！ 降りてきなさい！ 孝之さん来てくれたよー！」

母の呼び声は続く。わたしはその場に立ちつくしていた。身動きがとれない。心臓はこれでもかとはかりに早鐘を打つ。とつとつとつ、と軽い足音が階段を上がってくるのが聞こえた。母がここへ来る。部屋に入ってこられたら、もう逃げられない。わたしは老母によって夫の前へ引きずり出されるだろう。

そう思った途端、勝手に体が動いた。わたしは手近にあったトートバッグを引つつかみ、掃き出し窓を開け放ってベランダへ出た。そこにあつた便所サンダルをつっかけて、手すりから下を覗く。一階の窓のひさしに降りられそうだった。迷っている時間はない。母の顔を見たらわたしはまた動けなくなる。きつと自分から行動をやめてしまう。そうなる前に逃げないと。

部屋のドアが開くのと、わたしが手すりを乗り越えるのが同時だった。わたしは振り返らなかつた。ひさしの上から、間近に停めてあつた夫の車の屋根に飛び移つた。屋根には見た目よりも傾斜がありよめいたけれど、なんとか転倒せずに着地し、そこからボンネットへ、さらに地面へ降り立つた。植木に水をやっていた向かいの家のおばさんが、不細工な格好で上から降ってきたわたしをポカンとして眺めていた。

わたしは玄関脇に目をやり、自分の自転車を見た。近寄ろうとして、鍵を持っていないことに気づいた。走って逃げるしかない。わたしは走つた。

どこをどう走つたのかわからない。無我夢中だった。立ち止まれば即刻、夫に捕まる気がした。実際に夫が追いかけてくるかどうかは問題じゃなかつた。わたしは恐怖から逃れるためにサンダル履きで走り続けた。何度も何度もつまづいて転びそうになつた。でも一度も転ばなかつた。

心臓が爆発するまで走ろうと思つていた。実際にはそうなるずっと手前で息が切れた。足の運びはあつという間にスローになり、歩きになり、立ち止まつた。頭がガンガンして倒れそうで、でも倒れる前にしゃがみこんだ。体がとにかく必死に酸素を求めていた。荒い呼吸を何度も繰り返し、醜くあえぐ。やっと少し動けるようになった気がして、ゆっくり立ち上がった。神社の前だった。

右の手からかすかな振動を感じた。固く握つたトートバッグの持ち手から振動が伝わってくるのだった。そんなバッグの存在など、走っている間は完全に忘れていた。よく落とさなかつたものだと思う。わたしはバッグに手を入れ、振動しているスマホを取り出した。

家の電話からの着信だった。母がかけてきたのだ。出るかどうか迷つた。震えるスマホを持つたまま、神社の境内に足を踏み入れた。拝殿の横手の方にベンチがある。そこまで行ってまだ切れていなければ電話に出ることにしようと思つた。

砂利を踏んでベンチへ向かつた。ゆっくり歩いたのに、スマホはずっと震え続けていた。

ベンチに到着した。腰をかけた。スマホはまだ振動している。仕方ない。画面をスワイプし、耳にあてた。一拍置いて、「もしもし」と声がした。母ではなかった。夫だった。

「もしもし、メグ？ 今どこ？」と夫の声は言った。わたしは黙っていた。通話を切ることもできなかった。スマホを耳にあてたまま、凍りついていたのだ。

「何か言っつよメグ。僕だよ、孝之だよ。ケータイだと出てくれないからさ。ねえメグ？ もしもし？」

男が何かを言っている。何を言っているのか知らない。ただわたしはこの声を聞きたくない。

「メグ、話をしようよ。逃げずに、ちゃんと向き合っつさ。まだ僕たち、夫婦なんだから」夫婦っつ？ 誰と誰が？

「頼むよ、返事してくれよメグ。たしかに僕にも悪いところがあつたかもしれない。そういうの、自分じゃよくわからないんだ。これからは、ちゃんと言っつよメグ。黙っつないでさ。おたがいに、直っつほしいところは、ちゃんと伝えるようにしようよ」

わたしは誰かにどこかを直っつしてほしいとは思わない。全然思わない。わたしが男に思っつているのはもつと単純なことで、なんでこいつは今すぐ死んでくれないんだらう、っついう、ただそれだけ。

「謝るよ、メグ。謝るから」

謝る。わたしの目の前にひとつの光景が広がる。そこはキッチンだ。つけっぱなしのテレビから歌番組の音がする。仁王立ちした孝之が、メガネの奥のつり上がった目でわたしを見下ろしている。わたしは全裸だ。すべて脱げと言われ、その通りにしたのだ。裸でフローリングの床に正座している。足が痛い。「ごめんなさい」とわたしは言う。「ごめんなさい」とわたしは言う。さらに「ごめんなさい」と言いかけたとき、孝之が怒鳴る。「申し訳ございません、ダロウガッ！」ダロウガのところと声で一段と声を張り上げる。マンションの狭いキッチンでこんな大声を出す必要がどこにあるのらうとわたしは泣きながら考えている。目を落とすつ孝之の素足がある。足は垢じみていて、すべての爪が黒ずんでいる。右の親指にだけ昆虫の触覚みたいな太い毛が生えている。わたしはなんて汚い足の男と結婚したのらうと突然の驚きに打たれる。

わたしは耳に接着されたみたいなスマホを全力ではがし取り、地面にたたきつめた。ところが砂利がクッションの役目をしたのか、スマホは壊れることもなくまだ男の声を垂れ流している。怒りがわたしの脊髄を貫き、便所サンダルで何度も何度もスマホを踏みつめた。画面が割れ、ようやく男の声が途絶えた。

わたしは再び歩き始めた。神社の境内を出る。わたしは謝つた。四十四年間、ずつと謝

ってきた気がする。でもそれは偽りの謝罪、無意味な謝罪だった。謝るべきでない人ばかり謝り、本当に謝るべき人には決して謝らなかつたのだから。

灰田さんについての最後の記憶がよみがえる。わたしは、灰田さんに、謝ろうとしたのだ。灰田さんが最後に学校に来た、あの日。わたしが灰田さんを笑った、あの日。

放課後わたしは、灰田さんの家の前まで行った。空はくもっていて、風が冷たかった。冬が訪れようとしていた。

灰田さんの家は変わってしまった。外から見てもはつきりとわかるほどに荒れていたのだ。一階の窓が割れて、段ボールでふさいであった。玄関の前には黒いゴミ袋が積み上がり、道路まではみ出していた。ゴミ袋の破れ目からビールの缶が覗いていた。

玄関脇に立ったまま、ブザーを押すべきか、躊躇した。でも今謝らないと、きっとわたしは一生悔やむことになると思った。勇気を奮い起こして、ブザーを押した。

しばらく待っていると、家の中からドタドタと乱暴な足音が近づいてきた。しまった、おじさんが出てくる、とわたしは怖くなった。でも今さら逃げられない。

玄関のガラス戸が大きな音を立てて開いた。現れたのは、シミーズ姿の知らないおばさんだった。

「あら、平野さん」

そう言った声を聞いてわかつた。知らないおばさんじゃなかつた。灰田さんのお母さんだった。強烈な口臭がした。タバコのヤニと腐ったゴミが混ざったようなひどい臭いだつた。

「灰田さん、いますか？」とわたしは訊いた。声が震えた。

「いないよ」と灰田さんのお母さんは言った。「帰ってないの」

そう言われたら、どうしていいかわからなかつた。「ええと……」とわたしは言いよんだ。そのとき、

「だれー？」

家の奥から男の声がした。あのおじさんの声だった。

「すいません、また来ます」とわたしは言った。言いながら、もう二度と来ないだろうと思っていた。灰田さんのお母さんは何も言わず、後ろを振り返りながらガラス戸を閉めた。

数歩下がって、道路から二階の窓を、灰田さんの部屋の窓を見上げた。すりガラスの向こうに、ぼんやりと影があった。その影は、わたしを見下ろしているように見えた。

そして今わたしはまたその窓を見ている。いつのまに日が落ちたのだろう、周りはずっと暗くなっていた。知らないうちに長い時間が経っていたのだ。十四歳だったわたしが知らないうちに四十四歳になっていたように。何を思っここへ来たのかも、知らない。

たぶんほかに行くところがなかったのだろう。

窓の奥に、淡く明かりが灯っているように見える。いや、それは街灯の反射かもしれない。こんな誰も住んでいない廃屋に明かりのあるはずもない。でもわたしは玄関に歩み寄る。きつと戸に鍵はかかっている。取っ手に指をかけると、昔あれだけガタついていたガラス戸は、なぜか音もなくスムーズに開いた。

中に入る。やっぱり暗い。明かりなんてどこにもない。上り框にサンダルを脱ぐ。闇の中を手さぐりで進む。階段がある。昇る。一段ごとに階段は、イー、イー、と、誰かが声でいかげんに真似したようななきしみ音を立てる。上がりきったところに、表面のそこかしこが破れてボロボロになった襖。この向こうが灰田さんの部屋だ。

襖に手をかける。途端、まだ開けてもいないのに、部屋の中がはつきりと見えた。

数十本の蠟燭が、タンスの上、机の上、畳の上など、部屋中に置かれ、炎をゆらめかせている。部屋の中央に、蠟燭に取り巻かれるようにして、中学生のわたしと灰田さんがいた。わたしたちが見つめる先、窓の手前には、白い髭を生やした男性のぬいぐるみ、白雪姫に出てくる小人だろうか、それが足を投げ出した形で壁にもたせかけてある。ゴミ捨て場から拾ってきたみたいなの、汚いぬいぐるみだ。そのお腹に細長い紙が貼られていて、太いマジックで「灰田光雄」と書かれている。

わたしと灰田さんは、一本の穴あき包丁を、結婚式でケーキ入刀をする男女のように二人で一緒に持っていて、そのまま壁際のぬいぐるみの方へ、慎重に歩み寄っていく。そこでイメージは途切れた。わたしは依然として閉まったままの襖の前に立っている。今のは何だろう？ いつか見た夢だろうか？ それとも実際にあったことの記憶？

夢にしては細部まではつきりと見えすぎて、リアルすぎる気がした。とって記憶だとしたら、いったいいつのことなのか。灰田光雄というのはきつと灰田さんの父親の名前だろうけれど、それを書いたぬいぐるみをわたしたちは二人で刺した？ あんな大量の蠟燭を用意して？ そんな儀式めいたことをわたしたちはしたのだろうか？ いや、それはありえない。だってわたしは、灰田さんの父親が現れてから、一度も灰田さんの家に入っていないはずなのだから……。

ここで考えていても仕方がない。とにかくこの襖を開けてみよう。何か分かるかもしれない。

わたしは襖を開けた。

部屋の中央にローテーブルがあり、蠟燭が一本だけ灯っていた。テーブルの上や周囲にビールの空き缶が散乱している。部屋にはほかに何も無い。ものはないけれど、人がいる。窓際に、男が一人。両足を畳の上に投げ出し、壁にもたれて座っている。

蝟燭の小さな炎が、男の顔をゆらゆらと照らしている。老人だった。髪も髭も伸び放題に伸び、たるみきつた皮膚は黒く汚れていた。肩口の破れたロングコートを体に巻きつけ、つるの歪んだメガネをかけている。レンズの奥の細い目をいっばいに開いてわたしを見ていた。驚いている、らしい。

「なんだよ、お前……？」

老人がしわがれた声を出した。その瞬間、アルコールとアンモニアの混ざったような強い異臭がした。老人の顔に、見覚えがあった。「灰田光雄」と書かれた紙が、腹に貼られているように思った。

「役所のヤツか？　なんだよ、べつにいいじゃねえかよ、どうせ空き家なんだから。それにここは、もともと俺の家だったんだ、自分の家において何が悪い」

聞いてもいないのに、言い訳のようなことをべらべらとしゃべる。その声も臭いも、不快だった。とにかく黙ってほしくて、相手を制するようにわたしは右手を前に出した。老人は沈黙してくれた。ところがその目に、明らかな恐怖の色が浮かんでいる。わたしの右手に、包丁が握られていたからだ。ステンレスの穴あき包丁。わたしはいつからこんなものを持っていたのだろうか？

「お、お前、何する気だ？　そんな、ヤツパなんか向けやがって、何する気だ？」

老人が再びしゃべりだした。声が震えている。わたしには何をやる気もなかった。でも、老人が次に言った言葉で、気が変わった。

「……直子、直子かお前？」

「……」

「直子なんだな！」

わたしは声を出すことができなかった。とっさに反応することができなかった。

もちろんわたしは灰田直子ではない。けれどわたしは「言い当てられた」と強く感じたのだった。この老人の間違いは、完全に間違いだけれど、でも完全に正しい、と頭から芯を通されるように直感した。それは生まれて初めての感覚だった。わたしは悟った。こんなふうに正しく言い当てられたのなら、わたしに残された行為はひとつしかない。

わたしは包丁を持つ手を突き出したまま、老人の方へ踏み出した。

「おい！」

老人が声を張り上げる。恐怖のためか顔色に生気が戻り、急に若返ったようだ。わたしは歩みを止めない。一步また一步、老人のいる窓際へ近づいていく。

「ちょ、よせよせよせよせ！」

老人は慌てて畳に手をつき立ち上がろうとしたけれどどうも体をコントロールできず、

無様に尻もちをついてしまう。次の瞬間わたしはもう老人の目の前にいる。

刃の先端が老人の喉に突き刺さる寸前、わたしはたしかに灰田さんを見た。正確に言う
と、見えたのは灰田さんの手だった。そのやせた白い手は、わたしにぴったりと寄り添い、
包丁の柄を一緒に握っていてくれた。

喉を刃物に突き通された老人はもう永久に何もしゃべれず、目を剥いて、それでも逃げ
場を求めて窓の方を振り返り、そのまま背後へ崩れた。ローテーブルに激しく後頭部をぶ
つけ、蝋燭が畳の上に転がり落ちる。蝋燭の火は不思議と消えなかった。まるで「絶対に
消えない」という強い意志でも持っているかのように。

小さな炎を保ったままコロコロと部屋の入り口まで転がっていった蝋燭は、そこで襖に
ぶつかりやっと止まった。火の方は止まらなかった。破れ襖はもともと着火剤でも塗り込
めていたみたいに見事に燃え上がった。そうなることはわかっていた。

炎はあつという間に部屋中に広がっていく。蝋燭を何十本も用意する必要なんかなかつ
たわけだ。一本で十分だった。部屋はどんどん明るくなり、熱くなっていき、わたしは「も
うすぐ、もうすぐ」と思いながらその場に立っていた。

やがて明るさが限度を越え、視界がホワイトアウトした。我慢してそのまま待っている
と、徐々に視力が戻ってくる。周囲を見渡す。わたしはやっぱり、灰田さんの部屋にいた。

暑い。エアコンのない部屋。昼間でも薄暗かったはずの部屋は、今はとても明るい。圧
倒的な夏の光。雨の降らない夏。永遠の白い真夏。

わたしは畳の上に寝そべっていて、すぐ隣には灰田さんがいる。二人顔を寄せ合い、ラ
ジカセから流れる自作のドラマを聞いている。繰り返し、繰り返し、飽きることもなく。

灰田さんを見つめ合い、なんでもないことを語り合い、なんでもないことで笑い合う。

二人でいるだけで、楽しくってたまらない。

——今度はわたしの方からキスしてあげようか。

考えると、フフツと思わず声もれた。

「なあに？」と灰田さんが訊く。「なんで笑ったの？」

「秘密だよ」とわたしは答える。